
影隠し

真希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影隠し

【Nコード】

N2029A

【作者名】

真希

【あらすじ】

世界のあらゆるものを隠す”隠し屋”がこの世には存在する。最強兵器のプログラムチップを盗んだ少女に主人公はチップを隠すように依頼されるが、簡単にはいかなかった。日本軍事機関は第三次世界大戦を起こそうとし、世界のトップに立とうと企む浦城一族もまた、敵にまわった。見たこともない生き物が行く手を遮り、苦難を強いられる。はたして、無事に仕事をこなせるか否か。

第一話：出会い

寂れた公園のベンチに座るたった一人の青年に風は囁きかけるようにいたずらする。さらさらとなびく黒髪、整った鼻梁と薄っすらと桜色に染まる唇、透きとおるような肌の美しさはどれも、通行人たちの目を引いていた。人間だけではなく、風もまた、公園を散歩する一人だったというわけだ。

風は青年のそばでクルクルと旋回を続けていた。誘うように、呼んでいるかのように。

間もなくして風の願いは叶えられた。

青年が起きた。

それまで眠っていたのである。こんな昼間から、俗世間から離れたこの場所で、気持ちよさそうに彼は夢を見ていた。よほど心地よい夢だったのか、青年は欠伸びながら、せつかくの夢を妨げた風を

空を睨みつける。

「現実か。仕事に戻って言うのかな」

憂鬱そうに持ち上げた瞳の色も黒、布団代わりに被っていた上着も黒だった。全身黒づくめでできた男は、のんびりと立ち上がり、とぼとぼと公園を横断する。春つららかな雰囲気でありながら、どこか淋しげなのは、きっとはしゃぐ子供たちや、それを見守る両親たちの姿が見えないからだろう。

彼は一人、公園を出た。

家路へと歩み出した足は、しかし、すぐに止まる。

右方より聞こえた怒声が三つ、どれも殺意が込められており、どれも矛先は同じだった。前を走る少女が、彼らの標的。自分の体と同じほどの大きな熊のぬいぐるみを抱えながら走っているのが特徴で、幼いながらに彼女は必死になって逃げているようだ。

後ろから追いかけてくる三人のごついおっさん達は、いかにも悪者で、遠めに見ている通行人たちは、彼らをひどく不潔なものとして

視界に入れている。血走った目が、通行人をにらみつけると、小さくさと他人に戻っていく。警察を呼ぼうとするモノがいたが、実際に呼べたものはいなかった。

「おい、ガキ。まちやがれっ」

野太い声が少女の足を速める。少女は命がけて走る。

公園の入口で立ち止まったままの青年にぶつかったのは、青年が動かずに成り行きを見ていたからに他ならないが、視線を上げて青年の顔を見たのは少女の意思だ。

ぽつと頬をピンクに染めた少女は、しばしボウツとしていたが、背後から追いかけてくる怒声に意識を取り戻す。夢から覚めるために頭を左右にふり、夢のような美貌をそなえた青年がそこにいると知ると、手に抱え持っていたぬいぐるみをグイッと押し出す。

「これをあの人たちに見つからない場所に、隠して」

「面倒ごとは好きじゃないな」

「お願い」

無理矢理、ぬいぐるみを青年に押し付けると、少女は後ろをチラリと確認してから、までも全力で走り出した。角を曲がり、姿を隠す。青年が声をかけたが、少女はもう見えない。

「弱ったなあ」

これからどうしたらいいのか、と迷っているような言葉であるが、実際に彼の声音はどうでもいい、というようにのんびりとしたものであった。

「おい、そのあんた」

肩をつかまれた。三人が息を切らしながら、青年に尋問しようと目をぎらつかせている。尻ポケットが膨らんでいるのに、青年は気づいていない。だから、あえて彼らを刺激しないようにしようと青年は愛想よく微笑を浮かべる。

美しいと思った。

男でありながら、これほどの容姿端麗さは美女を超える。有名なモデルでさえ、この微笑を見れば腰砕けて喘ぎだすであろう笑みを、

チンピラのような三人組は夢のごとく眺めている。

青年の笑みに、蕩けたような目つきと半開きの口をどうにも戻すことが出来ず、彼らはそのまま話した。

「い、いま、ガキが来ただろう？ 預かったものを渡せ。いや、渡し
てくれ」

「預かったもの？」

大きく広げて見せた青年の腕の中に、あの大きな熊のぬいぐるみは
なかった。

見間違いだろうか。

彼らは舌打ちすると、青年のことも忘れて、また走り出した。青年
にぬいぐるみを渡したように見せて、実はまだ自分でもって走り逃
げているのだろう。

「あのガキ、捕まえたら、ただじゃおかねえぞ」

尻のポケットを上から叩き、その重さを確認する彼らを見送り、青
年はまたも欠伸してから歩き出した。あのぬいぐるみは、どこにも
持っていないかった。

第二話：隠し屋

「いやだ！放して！」

顔つきの悪い三人の男に、幼き少女は右腕を痣が出来るほど強くつかまれ、もがき助けを呼んだが、周囲の人々は関わりたくない、と冷めた表情で通り過ぎていく。さらに困ったのは、男たちが人通りの少ない路地裏へと少女を連れ込んだことだ。ここでは人は愚か、野良猫だつて通りそうにない。

ゴミのように放り捨てられた少女は、涙を流しながらも、嗚咽をこらえ、キツと大人相手ににらみあっている。

「ぬいぐるみをごへやった、理沙？」

少女の名前は理沙というらしい。そして理沙は、男たちが探しているぬいぐるみをもっていないかった。当然といえば当然、なにせ、あの青年に渡してしまっているのだから。どこを探そうとも、誰ともわからない素姓の知れぬ男に渡した以上、二度と会うこともできないし、調べて身元を洗い出すことだつて不可能なはず。これで、永久にあのぬいぐるみとは離別できたわけだ。

誰の手にも渡らず、ゴミとなつて処分されればいいのに、と理沙は願っていた。

「パパがなんと言つたかは知らないけど、どうせ、あれを持ち帰つたところで、あなたたちも殺されるだけだわ」

「ガキが知つたような口をきくな」

「本当よ、あれに関わつたものは誰であろうと殺されている。機密をもらしてはならないと躍起になっているの。あなたたちは、あれを持ち帰るだけかも知れないけど、パパはそう思わないわ。きつと中身を見てしまったのだ、と判断して撃つてくるわ」

「撃つてくるだあ？俺たちを殺すつてのかい？」

「そつよ」

「なら、防弾チョッキでも着てかないとな」

鼻で嘲笑う男たちを見上げながら、少女はどうして信じてくれないのだろうか、と口惜しくて仕方がなかった。握った拳は攻撃のためではなく、自分の非を潰すため。

けれども、すぐに口元は笑みを浮かべていた。

目的の物を誰の手にも届かぬ場所へと置いた以上、世界平和が約束されたようなものである。他の小さないざござはほんの戯れであつて、たいしたことではない。勝ち誇った笑みを浮かべつつ、理沙は身体を起こす。

「もう、いいでしょ？あなたたちの仕事は失敗したの」

男たちは、理沙の父に頼まれた雇われ者で、あのぬいぐるみは無事に理沙の手から奪還し、持ち帰ることが仕事であつた。ぬいぐるみが途中、見知らぬ男、それも絶世の美男子に手渡されたことにより、行方も消息も完全に途絶えた。人口の密度が多い東京での人探しは、考えただけでも気が遠くなるほど無駄な動作だ。三人もあきらめている。

けれども、完全にあきらめたわけではない。

尻ポケットの膨らみを再度確かめたあと、にんまりと口元をほころばせて、一人が理沙を捕らえようと手を伸ばした。

「おまえをつれて帰る。もしかしたら、あの男はおまえの知り合いかも知れないからな」

「知らない人よ。拷問したつて、わからない」

「いいや、やってみなくちゃわからねえだろ」

サツと青ざめる理沙は、拷問が一体どういったもので、どのような結果を生み出すのかを知っているようだ。小刻みに震える身体を両腕でしっかりと抑え、けれども、ここで男たちの手を逃れることはできない、と抵抗はしなかった。抵抗すれば余計に、無惨な結果になるだろう、最悪の場合も考えられる。

「失礼」

背後から届いた穏やかな声は、彼らに向けて放たれたものだった。ハツと振り向く三人の目が、見る間に薔薇色に染まっていくことが、

理沙には見ずともわかった。そこに佇む黒い影には理沙も硬直してしまっただからだ。

路地裏に伸びる黒い影。瘦身のラインは、青年のシルエットと同じだった。黒い、否、それよりも深い闇がすらりと伸び、こちらをじっと覗いている。美しい、と思った。影に美醜があるとは思わなかったが、初めてその影を見て、美しいと思った。本人も美麗であるが、その影もまた美しい。

けれど、長い間見ていると、その闇に飲み込まれそうで恐ろしくもあった。自分と同じ世界の住人とは考えづらい。哀しみが、恐怖が、背筋を凍らせつつあった。慌てて目を背けると、全身を襲っていた震えが小さくなった。通常の意識も働き始める。

公園の入口で熊のぬいぐるみを手渡したあの青年がそこにいる。手にはぬいぐるみを持っていないが、ここに来た以上、三人の手にかまひ、ぬいぐるみの隠し場所を無理に吐かされるだろう。拷問を受けるのは、青年に代わった。

「その少女」

サツと顔を上げた。彼の足下に広がる影に見入っていて、まだ影を見続けていたことに、いまさら気づいた。影が魅了したのだろうか、闇の魔力に引かれて陶酔しきった理沙を救ったのは、その美影を持った男自身。

「話が見たいんだけど、よろしい？」

「……え、ええ」

やっと絞り出した声は、かすれていた。深呼吸して落ち着きを取り戻してから、理沙は呆然としたままの男三人の脇を通りぬけ、青年の隣に立つ。

「場所を変えてから話しましょう」

「なら、喫茶店にでも入ろう」

歩き出した青年と理沙が、ちょうど五歩進んだとき、三人の意識が回復した。男に惚けていたなどという恥辱に身を震わせる。勝負に負けたわけでもないのに、この男には敵わないと、一瞬でも思っ

しまった自分たちを優位に立たせるため、ポケットに入れておいたものを素早く取り出す。心を落ち着かせ、余裕を持たせるためにはこれを握るだけで十分だった。拳銃である。

モデルガンではなく本物の拳銃で、引き金を引けば、実弾が発射される。三人の持つマグナムに込められた銃弾も、ひとたび放たれれば、人間の心臓へも潜りこむことが可能だ。つまり、人を殺せる道具を彼らは取り出したのである。

理沙は小さな悲鳴を上げて青年にしがみつき、何も言うことが出来ずにただ、銃口だけを見つめる。いつ、そこから死が発射されるのか、それを見極めようとしている。

だが、青年は逆だ。

見向きもしなかった。まるで、見る必要がないかのように、三人に背中を向け、ジツと動かずに立っている。銃口に怯え、立ったまま失神したのではない。

「危ないなあ」

あくまでも、彼はのんびりと、どこか場違いな口調で話す。このよきな現状さえ、彼には日常茶飯事なのかもしれない。だとすれば、彼は警察か。違う、こんなゆつたりとした警察がいるはずない。

「ちようどよかった、色男。俺たちは、おまえに聞きたいことがある」

「一緒に来てもらおうか、そのガキと一緒にな」

「断る」

「おまえに選択の余地はない。もし断れば、そのお綺麗な顔に穴が開くぞ」

「断る」

「つこのー！」

「待て、落ちつけ。どう見てもこっちが有利なんだ。無闇に発砲するな、警察がきたらどうするんだよ」

「でもよお」

「相談は後にしてくれないかな。こっちは帰りたいたいんだけど」
青年の処理についてもめているというのに、青年は他人事のごとく、話を打ち切った。

三人のうちの左端にいた男が、怒りで手に力を込める。とっさのことで、仲間が止めに入ることも出来ず、銃声が響いた。

「下手だね」

銃弾は狙いから大きく反れ、コンクリートの建物の壁に埋め込まれた。やはり、青年は銃になれているらしく、一発撃った男の腕前を評価している暇があった。くるり、と向けていた背をまわし、正面から三人と相對する時間さえある。

脅しにもならない銃を、もう一度ぶつ放そうとする男は、指が動かないことに気づいた。自分の意思は引き金を引け、と怒号しているにもかかわらず、体はまるで自分のものではないかのようにピクリともしない。安全装置が降りていないわけではない、ならばなぜかと視線を下ろしたその先に、闇を見た。

男の足下には、影があった。自分のものではなく、黒い男の影だ。路地裏の暗い場所を照らし出す陽光は、青年の背後から射し込んでいる。青年の影は三人の足元まで広がるほど伸びていた。

「物騒なものは、捨てなさい」

手首に痺れるような痛みが走ると、三人の手から拳銃は自然と離れていった。落下する音がなり終えると、青年は満足したようにうなずく。

全身が金縛りにあつたように動かない。動け、と言っても動かない。動けない。

背筋を凍らせる何かが、三人に理性を失わせた。自分の意思とは別の意思が身体を乗っ取っているような感覚を忘れるためにも、彼らは叫んだ。

「アレはどこだ!」

「アレ?」

「ぬいぐるみだ!そのガキからもらっただろうが!とぼけやがって、

さつきも嘘ついてたんだな！」

「はてさて」

「舐めやがって。体が動かないのもおまえのせいだろ！」

「言いがかりだ」

「絶対、おまえだ！」

怒鳴り散らす男へ、青年の黒い瞳がゆつくりと移動した。それだけで、見られた男はうつと喉を詰まらせたように沈黙する。

何かある、と悟らずにはいられない。

「と、とにかくだ。おまえにはそのぬいぐるみ関係ないだろう、返してもらおうか」

「ぬいぐるみか。なら、君たちにも関係ないだろ？それとも、その年になつてもまだぬいぐるみと遊ぶ趣味があるのかな？」

クスクスと笑う青年に、恐怖に怯えていた理沙でさえも、笑みを浮かべることができた。

「偶然だけど、いい人にアレを託すことができたみたいね」

至近距離でしか聞こえない小さな声で、理沙はしゃべりだした。

「ね、ちゃんと隠してくれた？」

「まだ」

青年も小声で返す。

「ちゃんとした依頼じゃないから、まだ隠してないよ」

「依頼？ああ、お金が欲しいってことね」

「ああ、知らないよね。僕の仕事を知っている人は少ないから」

「……何のこと。あなた、どんな職業なの？」

理沙は興味津々に顔を上げた。青年の顔は凜と正面を向き、楽しそうに微笑んでいた。その仕事にやりがいを感じているのか、仕事そのものが楽しいのか。両者だろう。

「“隠し屋”」

「え」

「僕の仕事は、あらゆるものを隠す“隠し屋”」

青年の瞳が輝いたとき、理沙も男たちもはじめて聞くその職業に首

をかしげ、同時に興味も持った。

隠し屋。確かにその名を知る者は、あるいは存在すること自体知っている者はほとんどいない。また、その職業についているものはおそらく、この世で数えるほどしかないだろう。知る人ぞ知る、世界観である。

その名のとおり、隠し屋の仕事内容は『隠すこと』。離婚の危機の原因である不倫関係の間柄を、被害妄想だと語り。殺人現場に残された証拠を、現場で検証している刑事たちに気がつかせず処分したり。会社が山のように重ねてしまった借金を支払済みとして届出を出したり。

考古学者、冒険者たちがみつけた古代秘宝を人目につかぬ場所へ移動させたり。善悪の区別はない。高い報酬であればあるだけ、あらゆる事柄を依頼者の望むまま、巧妙に隠す。時折、依頼を受け取らない隠し屋も存在するが、ほとんどは承諾する。

「あなたが、その、“隠し屋”さん？」

「そう。よろしく」

ぺこりつと頭を下げた青年の商売根性は、この張りつめた緊張の糸をたやすく解いていった。理沙のほおが緩む。

「あたしは理沙。あなたに仕事を依頼するわ。内容はもちろん、あのぬいぐるみをあいつらの手に届かないよう隠すこと。えっと、名前は？」

「紫影悠馬」

「しえいゆうま？面白い名前ね」

いつの間にか声を上げて笑っている理沙に、全身金縛り状態の男たちはカッと顔面赤くして、ほえる。

「やっぱり、その男にあれを渡したんだな！」

「残念ね、もうあれがこの世に出てくることはないわ！」

「ちきしょっ」

渾身の力で見えざる魔の手を振り払い、足元の拳銃を拾い上げた男であったが、次の瞬間には、また手から拳銃が転がるようにして引き剥がされ、男は目を丸くする。

あきらかに人為的な力が動いている。目には見えないが、いや、見落としているだけなのかもしれないが、男の意志とは別の意思が、拳銃を握らせなかった。

「銃器の使用は法律で固く禁止されてるんだよ」

黒服の青年　紫影悠馬がそつと笑みを浮かべて言った。

ぼんつと理沙の肩を叩くと、男たちのことなど忘れたかのように視線を外し、踵を返して歩き出した。二人の背中を見つめながら、男たちは止めることも、声をかけることすらできなくなっていた。

眼には見えない恐怖が、彼らに動きを与えなかった。一步でも動けば、どこかから攻撃してくるだろう。足元に広がる黒い闇が、徐々に這い上がり彼らの首を絞めるまで、彼らは自ら死ぬことも許されなかった。

第三話：浦城一族

ぐるぐると悠馬のまわりをうろつく理沙は、あの大きな熊のぬいぐるみを探している。あれほどのものを、一瞬でどこに隠したのか。瘦身の悠馬が服の下に隠し持っている可能性はゼロ。

呆れながら、悠馬は依頼内容を理沙に確認し、報酬もきちんと約束する。

「でも、あたしのお小遣い分しかでないわ」

「さようなら」

即刻帰ろうと進行方向を変えた悠馬に、あわててしがみつくと理沙であったが、悠馬の歩きのスピードは速かった。金が手に入らないとあって、やる気を無くしたのか、ぬいぐるみをあの男たち渡すべく悠馬は後退する。

金に厳しい、別のいい方をすればケチである。悠馬の性格を理解した理沙は、頼るべきは悠馬しかいないとわかっているから、どうにかしてひきとめようとする。

「わかったわ！お金はちゃんと払う！パパのへそくりからでも何からでも、規定料金分はしっかり払うから戻ってきてよ！」

「話を戻そうか」

期待に満ちたその声は、理沙の父親のへそくりが幾らあるのかを計算し始めている。現金な人だと思いつつ、理沙は悠馬が嫌いになれなかった。むしろ、好意的な思いがある。この世のものとは思えない美貌のせいもあるだろうが、三人の雇われ男たちを触れもせず追い払ったせいでもある。

悠馬はそこに立っただけだった。

拳銃を取り出し、殺気を振りまいていたのは男たちのほうだった。

なのに、悠馬は平然と向き合い、理沙を窮地から救った。得体の知れない恐怖は、悠馬の味方だろう。理沙は絶対の自信を持った。

「絶対あの人たちや、パパに渡さないでね」

「はあ。ちなみに中身聞いてもいいかな？」

「え」

「ぬいぐるみの中身。ただの綿だけじゃ、あの重さにはならないよ」
わかっているのだ、悠馬は。

ほんのわずかな重さでも、普通のぬいぐるみとは別のものが詰まっていることに、悠馬は渡された時に気づいていたのである。依頼品を興味本位で開き見てしまうのは、プロのすることではない。

「言わなきゃダメ？」

「別に」

まるで興味がない悠馬である。悠馬以外の人間ならば、それなりの好奇心で中身が見たくなっているだろうが、悠馬は本当に興味がないさそうである。仕事とあらば、たとえその箱の中身が核兵器だろうが、リンゴ一つだろうが、悠馬はきちんとこなしてみせる。それが悠馬のプロとしての腕前だった。

理沙は思い切って、悠馬に話し出す。

「あのぬいぐるみの中には、プログラムの詰まったチップが入っているの」

「へえ」

「第二次世界大戦で使われた原子爆弾があるでしょう？あれのせいで、日本は負けを宣言したわ。けどね、あの時の日本には核を超える最強兵器が機密に保管されていた。戦争で使わなかったのは偶然だけど、おかげでその兵器は更なる強化と進化を続けることになったわ。そうして完成したのが、このチップ。あまりにも複雑な構造と膨大な計算式で、成功例はこれ一つ、二度と同じものは作れないとパパが言っていたわ」

「君のパパが？」

「パパは研究員なの。これを作ったのもパパよ。はじめは銃や戦車をいかにして改造するかを悩んで、日本軍事機関に情報を提供していたけど、ある日パパは気づいたのよ。そしていつのまにか、これを完成させていた。家族のあたしやママが気づかないうちにね」

なぜ急に、何を悟ったのか。理沙の父親は、悪魔のささやきを聞いたのかも知れない。

そして、作り出したプログラムチップは、実に強力な武器となった。これひとつあれば、すべてが力によって制裁される。へこへこと下げていた頭を上げて、自分が相手よりも優位に立つようなそんな力を、一夜にして手に入れられるわけだ。日本という枠を越え、世界を従えさせることすら可能である、と理沙は言った。

「もちろん、日本政府はそんなチップを野放しにはしなかった。すぐに提出するように軍事機関が催促してきたわ。けど、パパは断った。だってチップさえあれば、軍事機関だって怖くないもの」
軍事機関を支配し、自ら操ることすら、そのチップを持てば可能だという。

しかし、そのチップを使用する前に自衛隊によってチップを盗まれてしまった。防犯センサーが起動し、すぐさまチップを奪い返しに父親は立ち向かったが、チップなしの彼は自衛隊にかなわなかった。両足を失い、それでも立ち向かってくる理沙の父親の執着心に、自衛隊は恐怖すら感じていただろう。その甲斐もあってか、銃撃戦が終わったころには、チップを奪い返すことが出来た。それから今までチップを死守することができた。

「でも、いつまた、軍事機関が動かないとも限らないから、あたしはチップを持ち出して逃げたわ。チップさえなくなれば、パパも死ぬことはないでしょう？ それなのに、パパはあいつらを雇ってまで、チップを取り返したかった。あたし、怖かったわ。チップのせいだ。パパは人が変わったし、たくさんの血も流れるんだって思ったから。残虐な光景を描いてしまったのか、理沙は身を抱えて震えている。この少女の必死の願いも、父親が無残に潰してしまうは、はたしてこの世の常なのだろうか。少女の願いをかなえるために、父親が手をかすことこそ常ではないか。

伏せた悠馬の視線が、ふと曇ったようだったが、理沙は見えていなかった。

「お金をもらったら、すぐに帰ってね。パパに見つかるらと厄介だから」

「了解」

「誰にもしやべらないですよ？自衛隊が来ても、知らないっていえる？」

「……馬鹿にしてる？」

「いいえ、でも、不思議なのよ。さっき預けたばかりなのに、もうどこにもないなんて。いったい、何処に隠したの？」

「内緒」

「まさか、もう誰かに渡したなんてことないわよね？そうだったら、心配だよ」

「心配ない。誰にも見つからないよ」

「駅のロッカーとか、下水道の中とか、すぐにばれる場所じゃないわよね？」

「おもちゃ屋に紛れ込んでることもないから、大丈夫」

「なら、どこにあるの？手に持ってる、わけじゃなさそうだし」

「秘密」

「無理矢理にでも在処を吐かせるしかねえな」

「ん？」

理沙にしては品のない言葉と口調に、思わず足を止めた悠馬の背後から、殺気がこぼれてきた。

閃光を伴って降り注がれたのは、鋭く尖ったナイフ。

アスファルトに突き刺さるほどのそれは、しかし、悠馬に傷をつけてはいない。悠馬が反射的にさっと避けたおかげで、ナイフが刺さっただけに終わったのだ。理沙も無事である。悠馬に付き押され、尻餅ついたが、それだけで済んだ。

「もう、何よ！」

命を狙われていたことすら、理沙は気づいていない。突然、押した悠馬に文句ばかり言っている。

けれども悠馬は、理沙の声を聞いていない。ナイフが飛んできた方

向、ナイフを投げた人物を見ていた。

全身を茶色い布で覆っている長身の男が歩み寄ってくる。不敵な笑みを浮かべ、悠馬をジロジロと眺めていた。風で布がめくけると、彼が襲撃犯であることが一発でわかった。全身にナイフを巻きつけていたからだ。

スツと手を伸ばし、突き刺さったナイフを抜き取ると、それを手で弄くりながら、またしても悠馬に目を移す。どう見ても、何か用がありそうだ。

「聞いてる？紫影さん！」

隣の理沙はまだ騒いでいた。ナイフ男は、理沙のほうにも目を移したが、すぐにまた悠馬に戻す。嫌な目つきだ、と悠馬は不機嫌そうに見返す。

「よせやい、そんなに見られると、男の俺でも気がどうにかなっちゃうまいそうだけせ」

「変態」

「俺だけじゃねえさ。あんたに見られりゃ、男女問わずあんたに惚れちゃうぜ」

「話はそれだけ？」

「おっと、あやつく本題を忘れるところだった」

忘れてしまえ、といわんばかりの視線を悠馬はナイフ男へ投げつけ、理沙を小突いてさっさと歩き出そうとする。ナイフ男が行く手を阻むが、悠馬はめんどくさそうな表情を変えずに、顔を上げた。

「退いてくれるかな、変態君」

「勝手に人を変態呼ばわりするんじゃないねえ。俺はおまえが持っているぬいぐるみとやらをもらいに来ただけだ」

「変態改めロリコン」

「違う！ぬいぐるみと言っても、その中に含まれている最強兵器が欲しいんだよ！」

「ちよつとあなた！なんで、ぬいぐるみの中にチップが入ってるって知ってるのよ！」

血相変えて理沙が飛び出し、悠馬が下がった。父親のもとから盗みぬいぐるみにつめて家を飛び出したのは、自分とそれから研究員ぐらしいか知らないはず。なぜ、こんな見も知らぬ相手が知っているのか、理沙は混乱していた。

ナイフ男は理沙には興味無さそうに視線を外し、悠馬だけを相手にする。

「俺は浦城一族の長男、浦城和雄だ。こっちが名乗ったんだ、名前くらい教えてくれるよな？」

「紫影悠馬」

「一生忘れないぜ」

「変態」

「いい加減、話を進めさせてくれないか」

「どうぞ」

「ちよつと待つて！」

ようやく話が進むのかと思いきや、理沙によって話が中断される、どころか始まりもしない。ナイフを握りなおした和雄だけでなく、空を見上げた悠馬でさえ、理沙が邪魔だと思わずに入られなかった。一向に先に進まないではないか。

そんなことはお構いなし、理沙は自分の思ったことを次々に口にす

る。

「浦城つてあの、もしかして、パパと同じ研究員の？」

「同じ、じゃない。部下だった。そのチップが出来たせいで、俺の親父は片瀬雄一郎　つまり君の父親に殺された」

「嘘。パパは、研究員を殺したりしないわ」

「したんだよ。チップの力を試そうとしてな。俺の親父は実験材料にされて死んだ」

「そんな……」

「別に恨んじやいない。だから、おまえを殺そうなんて考えてないから安心しろ。いや、あのチップを渡してもらえなければ、殺すぞ」

「どうして？チップはもう手の届かない場所に隠したわ。それでい

いじゃない」

「親父の復讐のためにチップを奪い、破壊したいだのって言う考えはさらさらない。チップを手に入れ、片瀬よりも日本政府よりもトップに立ち、世界を支配したいっていう願いはあるがな」

父親の死を嘆くのではなく、その死から自分に有利な情報を得たというのか、この和雄という男は。

「俺だけじゃない、母さんと弟も別口の情報を確かめにいってるぜ？まさか、『ぬいぐるみにチップを仕込んで逃げ出した娘』の情報が当たってるとは思わなかったがな」

「はずれさ、帰りたまえ」

「いいや、俺の見たところ、あんたが隠し持ってる。どこに置いたかは知らないが、場所を吐いてもらおうぞ」

「知らないな」

「余裕なのは今のうちだけだぞ」

彼は懐から鋭い武器を取り出す。今度はナイフではなく、注射器であった。それも、悠馬に向けて投げるのではなく、自分の腕に刺さうとしている。

「これはな、筋肉強化剤だ。そのチップを作る過程で生まれたものさ。それを親父は持ち帰り、それなりの工夫を加え保存しておいたものを俺がこうして、利用してるってわけだ」

「君の母親と弟も、それを？」

「いいや、母さんも弟も別の武器を持っている。知りたいか？」

「ぜひ参考に」

「秘密」

さきほどの悠馬と同じセリフを吐き捨て、和雄は飛び上がった。一回の跳躍で理沙の身長を飛び越え、悠馬の眼前まで迫ったのは人間のできる技ではなかった。これが筋肉強化剤の出した結果だろう。振るったナイフの刃先が悠馬の首筋に朱線を流すために空を走った。風に散ったのは赤い血ではなく、ただの空気。和雄の刃先は悠馬をきる事が出来なかったのである。

悠馬は一步はなれた場所に立っている。

「避けたな」

「もちろん」

「俺のスピードを超えたのか」

筋肉強化した和雄の脚力と素早さは、のんびりとした悠馬の避けるスピードをはるかに超えるはずであった。だが、悠馬は避けた。

偶然だろうか。再び駆け出した和雄の拳は、悠馬の腹を抉るはずであった。

それなのに服すら掠りもしなかったのは、和雄のスピードを悠馬が超えている証拠であろう。口を吊り上げて、和雄は愉快気に走る。

「強化した俺より早いってのかい？紫影悠馬」

「さて」

「話す余裕まであるじゃねえか」

シュ、シュツと空気を切り裂き進むナイフの音が乾いた空気に鳴り響く。理沙はぼつとその成り行きを見守っているが、犬の散歩をしていたおばさんや、ショッピングしていた女子高校生たちは甲高い悲鳴をあげて逃げ惑い、瞬時にしてそこから立ち退いていく。大混乱となった。

そんななか、悠馬と和雄は攻防　ほとんど和雄の攻めだが　を繰り返している。

右へ、左へ翻弄しているのは和雄か、それとも悠馬か。これだけ動いていながら、どちらの疲れている様子は見せない。

「知ってるかい、紫影さんよお」

「何を？」

「この街にはとんでもない化物が住んでるんだってな。ランドセル背負った情報屋の婆さんとか、十字架の効かない吸血鬼とか。そもそものこの街の地下には、人間以外の生物がうようよ生息する世界があるって噂だ。妖怪とか、お化けとか、魔物とか色々と呼ばれているやつらだよ」

斜め下から持ち上げられたナイフを避けた悠馬に、和雄は思いつき

り突いて来たが、さらりと逃げられる。まだ一度も悠馬に傷をつけられない。

「だが、一番の化物は影を操る美男子だそうだ」

「ほお」

「やつ影に魅入られたが最後、闇に飲まれるってな。あまり多くは語られてないが、そいつが強いと誰もが認めているらしい。もしかしたら、チップと互角に張り合えるかもしれないと言っていた」

「言っていた？誰が？」

「弟さ。オカルト好きなやつでな、その妖魔たちがいっぱいいる地下帝国つてのにも、言ったことがあると自慢していたが、俺にはさっぱりだった。だが、いまなら俺にもわかる。この世には確かに化物がいるってな」

「ちらり、と和雄は悠馬の足元に広がる黒い影に注目した。黒々とした影、これは陽光の作った偽の人間だろうか。まるで生きているようだった。そして、悠馬同様、美しい。

「おまえだよ。この街の化物はお前だよ、紫影悠馬」

「化物とは失礼な」

「だとすれば、チップの回収は厄介だな。一度、母さんたちと合流してからまた来たほうがよさそうだな」

「決断すれば、行動は素早かった。右突きを放ち、悠馬の態勢を崩すと、サツと身を引き飛び上がる。そしてそのまま、脱兎のごとく道路を横断し、あつと言う間に道の向こうに見えなくなった。

「ぼんやりとする理沙、見送る悠馬の視線もまた、呆気にとられている。

「何しに来たんだよ、あいつは」

「ナイフを投擲し、話かけてきたのは和雄だった。だが、目的のぬいぐるみも回収できず、悠馬に傷をつけることも出来ず、ただ、帰っていった。始めから関わらなきゃよかったのに、と思わずにはいられなかった。

「だが、情報を得た。悠馬は、今回の仕事が簡単に終わりそうもない

と踏んだ。日本軍事機関なかでも優秀な兵士として自衛隊がまずあげられる。人間離れした力を持った浦城一族、裏世界に通じた知識をも持ち合わせているとなれば厄介な相手だ。

そしてどちらも、チップを狙っている。その力ですべてのものを支配しようとする二つの勢力に対し、チップを作っただけの片瀬の力は軟弱なものだ。悠馬が加わることで、どれほどの力になるかはわからない。

それにしても、悠馬は大きな熊のぬいぐるみを 最強兵器のプロ
グラムチップを、一体どこへ隠したのだろうか。

第三話・浦城一族（後書き）

わけのわからん小説かもしれないませんが、ここから先でどうにか繋げるつもりです（冷汗）

第四話：狂う家族

片瀬雄一郎の豪邸に着いたとき、理沙に家は研究所も兼ねていると言われたが、悠馬の耳に届いているかは定かではない。その堂々とした表札、門から玄関まで除草の行き届いた庭をとおり、黒光りする瓦屋根を見上げるまで、悠馬はずっと値踏みの計算をしていた。すべて売れば、一体いくらになるのか。この家の主は相当の金持ちだ。

その娘の理沙も、見た目以上の令嬢ではないか。

「期待してるよ、理沙ちゃん」

「何を期待してるのよ。あなたって人がよくわからないわ」

重々しい扉を開き、中に入った途端、悠馬の妄想は途切れ、すぐにもこの家を飛び出したくなった。

ふんと鼻につくこの臭いは、アルコールのにおい。それも、酒に溺れる亭主がいるのではなく、不気味な薬剤を多く扱う研究員がすむ家なのだ。掃除されていない廊下や部屋のおかげで、この豪邸が幽霊屋敷に見えてきた。さすがに客間のリビングと理沙の部屋、それから母親の部屋もキレイに掃除されているが、それ以外はさっぱりだ。

「人を雇って掃除させるとかすればいいのに」

ぼつりと言った悠馬に、金庫を弄くる理沙は、首を横に振る。

「いたけど、この前解雇しちゃったの。実をいうと昨日、ここでパパと研究していた研究員もみんな外へ追い出したわ。全部、チップのせいよ。チップの力を独り占めにしたいとパパが勝手に言い出したのよ。研究員たちは怒ったわ。それで、このありさまよ。罵倒だけじゃなく、暴力まで出て来てね。椅子も投げられるわ、さらに割れるわで大変だったのよ。そのおかげで、あたしは外に出ただけどね」

それにしても、荒れすぎだという言葉を出す前に、理沙が突き出し

た金に、眼を奪われた。規定以上の金額が差し出されている。

「上乗せしとくわ。だから、絶対守って。さっきの浦城さんとも、自衛隊にも奪われちゃだめよ」

「わかりました、おまかせを」

意気揚々と受け取った悠馬は、軽く頭を下げ、すぐに玄関へと歩き出した。途中母親らしき人物に出会ったが、夫の研究のせいでもんでもない眼にあい放心状態の母親の瞳には、悠馬が映らない。

「理沙……理沙……」

「ママ……そんな……昨日の朝は元気だったじゃない。どうしたの？あたしがいなくなつて、何があつたのよ？」

自ら母親に抱きついた理沙を、母親は理沙とは認識していないようだ。理沙の手が袖に触れた瞬間、鬼のような形相を剥き出しに、奇声をあげて奥の部屋へと走り去ってしまう。

「ママ！ママっ！」

すぐさま追いかける理沙の背中を黙って見送る悠馬は、非情。二人の消えた奥の部屋から、なおも叫び続ける母親と理沙の泣き声がこの広い豪邸に響いていた。静けさのみ残った家の中では、よく通るわざと聞こえないフリをしているように悠馬は目を閉じ、ゆっくりと外界へと通じる扉を押した。

理沙は期待していた。もしかしたら、悠馬は引き返して、狂ったように暴れる母親を止める手助けをしてくれるのではないかと。

扉が閉まってもなお、理沙は待ち続けていた。悠馬に抱いた冷めぬ感情をそのまま押し留めておきたいとも思っていた。

吐息交じりのため息をついた理沙の目は、頬を引きつらせ、手に握った鉄の刃で宙を切り裂く母親を映している。

割れた皿の破片がちらばり、包丁振り回す母親　ここは台所、母親にとっては住み慣れた環境の中でも自尊心を保つ一番の場所であり、侵されるはずのない絶対の領域でもあった。なのに、銃を持った男たちが、冷徹なまなざしで卑しい笑みを浮かべる誰とも知らぬ人間が、次々となだれ込み、母を取り押さえ、チップの場所を吐か

せるためにあらゆる方法で迫ったに違いない。その方法は口にしたくないが、この母親の様子は尋常ではない。

何が政府だ、自衛隊とはいったい何のためにある。国民を守るべく存在してくれてもいいのではあるまいか。ぎゅっとつぐんだ理沙は、誰かに名を呼ばれたように振り返る。

キイ、キイと小さな音が近づいて来る、車椅子の音だ。この豪邸の主にして、問題のプログラムチップを作り上げた研究員、片瀬雄一郎の声であり、両足を失った彼の今の足が鳴らした音だ。

いきなりだったので驚いた理沙だが、それが父親だと知り、ほっとしたのもつかの間、すぐに敵愾心剥き出しに手を振り払った。

「『ただいま』だって言わせてくれないんですよ！」

「いま、言ったではないか」

「『おかえり』は？」

「おかえり、理沙。ぬいぐるみは持って帰ってきてないのかな？」

「もう！」

雄一郎の脳内では、チップのことだけが巡り、娘のことなど何も考えていない。父親に背を向ける理沙は、母親を止めるべく、再度優しく声をかけるが、母親は聞く耳を持たない。

「あれがいかに重要なものか、おまえにもわかるだろう。勝手に持ち出して、反抗期か？ いやいや、反抗期だけですむ問題ではないぞ。あれが世に出れば、世界中が混乱する。第二次世界大戦が起きるとも限らないのだぞ」

「パパが持つても同じでしょ」

「私は違う。戦争などという不利益なことをするつもりはない」

「でも、人を殺すわ」

「優秀な人材を生かすべきだ」

「やめてよ。人なんて殺さないで。パパはそんな人じゃなかったはずよ」

「人間は己の欲望を満たすために、必要のないものは切り捨てる。

パパも人間なのだよ、理沙。理沙と同じ」

「違う！パパとあたしは違う。あたしは人殺しなんて真つ平よ」

思わず大声をあげてしまった理沙に、刃物を振り回していた母親はびくりと怯え、カランと得物を取り落とす。すかさず理沙は包丁と母親を離し、大丈夫だからと何度も耳元でささやき続けた。

しだいに母親が落ち着き、脱力と同時に涙を流して理沙にもたれかかる。理沙はしっかりと自分の母親を抱きしめる。

「ママ、あたしはここよ？理沙はここにいるわ」

「理沙……理沙？」

「そうよ、ママ……」

くぐもった笑いが雄一郎の口から漏れると、理沙は怒りと哀しみが同時にやってきた。涙は自然に流れている。何かとんでもないことがすでに、この家で起きてしまったことに気づいた。父と母と、冗談言って笑いあうことは、もうできないのだろうか。

背後の雄一郎を振り向くことが、怖かった。

「ねえ、パパ……ママはどうしてこんな……？」

「ママもおまえがチップを盗み出すのを手伝った。チップをぬいぐるみに隠し、それをもって逃げ出したおまえの後を追おうとしたパパを、ママは止めたのさ」

重い金属の音がした。

自動小銃の安全装置が外れる音だと理沙は気づかなかったが、その音が心臓を握りつぶすように響く。冷たい風が、舞込んできたようだった。

「その時のパパは、偶然にも銃を持っていてね。護身用に持っていたものだ、ほら、チップを盗みに自衛隊がきたらろう？また来た時のためにと買っておいただ」

「ママに向けたのね！？なんてことを……」

「殺すつもりはなかった」

「当たり前でしょ！パパはママよりチップが大事なの？ママに銃を向けても平然としていられるの？……それに、あたしにもそれを……」

……

拳銃を握った雄一郎が理沙に近づき、銃口を向ける。ゆつくりと理沙は父親を見上げたが、視界が揺らめいて見えない。泣いているのだと知ったとき、理沙は歯を食いしばって声を出すのをこらえるのが精一杯だった。ぎゅっと胸の中の母親を握り締め、震える瞳のまま、父親を見上げる。

雄一郎は笑う。

「助けを呼んでもいいのだぞ、理沙」

「……助け？」

「そう、さっきの男なんてどうだ？あれがおまえの彼氏かどうかは知らないが、チップを渡した相手だということは知っているぞ」
首を振ることすら、理沙は出来なかった。

「私はおまえの生き方にあれこれ口出すつもりはない。あの男、なかなかの美男子だったようだし、私は反対しないぞ」

「……あ、あの人は関係ないわ」

「おや、目の色が変わったな。よほど、あの男に入れ込んだようだ」
「関係ないっていつてるでしょ。これ以上あの人を侮辱すれば……」

「すれば？何かするとかいうのか、理沙。私はおまえのパパだぞ」

「あたしはパパの娘よ。その娘に銃を向けてるなんて、信じられないわ」

本気で怒っている理沙の気持ちを踏みにじるかのように、雄一郎は銃口を向けたまま、微動だにしない。少しでも動けば、たとえ娘であろうとも、容赦はしないと、その見開いた眼は物語っている。やせこけた頬は、彼のチップへの強い思いを感じさせた。

「あの男を呼ぶのだ。そして、チップを返すのだ、理沙。愛しい娘よ」

「あたしも愛してるわ、パパ。でも、もう遅い。あの人にはお金も渡したし、二度と他人の眼には触れない場所に隠してもらおうようにお願いもしてあるもの！」

「もう一度ここへ呼べ。金は倍にするから返せというのだ」

「いやよ。これ以上、あのチップがこの家にあると……」

「チップがないともつと大変なことになるぞ。くく、私の言っていることがわかるね、理沙。もう高校生なのだから」

「高校生？」

雄一郎の眉間にしわが刻まれた。愛娘を見つめる視線が、はっと背後を振り返り、何もないと分かると左右、天井まで見上げて声の主を探す。

「……理沙の声、ではないな」

銃を握る手に力が加えられ、声のした方向に向き直る。いない。いない、どこに。

この家の住人以外に人はいないはずである。それなのに、今の声は何なのだろうか。気のせいか。

厳しい目つきで凝視すると、理沙たちが蹲るその背後の勝手口前に、黒い影のようなものが見えてきた。開け放たれたままの扉が、軽く揺れている。

開いていただろうか。ついさきほどまで、扉は完全に閉じられていたはず。

「……ああ」

喘ぐような理沙の声、潤んだ瞳を見るまでもなく、雄一郎には扉の向こうにある人物が隠れていると見破った。

それも、どうやら隠密の術に長けた殺人鬼のようで、気配ひとつ感じさせないのに、こちらに与えるプレッシャーは背筋を凍らせる。

扉の隙間から見える影、その影を前に、息を飲むことだけで三十秒の時間を要するとは自分でも信じられないことであった。

ところが、その人物は隠れている気はさらさらならしく、扉を自ら開け放ち、堂々と登場した。黒い影から生まれた闇は、天使の顔を持っている。闇色の影を支配する人物とは、これほどまでに美しいものだろうか。これほどまでに、恐怖をあおる存在なのであるだろうか。

紫影悠馬。それが彼の名だ。

「帰ったんじゃないの……？」

理沙の呟きにも似た声は、しかし、静まり返る台所には十分すぎるほどよく通る。

「いや、ちよつと」

照れ笑いながら応える悠馬の声もまた、一字一句はつきりと届く。その唇が放つ呼吸音さえ、聞き逃すまいとしているのだと気づいたころには、悠馬が土足で家上がりこんでいる。

突然の悠馬の登場に呆けたままの雄一郎と、娘の名前を呼び続ける片瀬夫人とを目に収めた後、確かめるように理沙を見た。驚きで瞬きもしない理沙を、悠馬はじつと見る。これが本当に高校生かどうか疑っているのだろうか。

「まさか、あたしを助けに来てくれたとか？」

「僕は正義のヒーローじゃない」

「ならば、娘から預かっているチップを私に渡してくれるかね？」嬉々として雄一郎は引き金に指をかける。胸の鼓動の高鳴りは研究時に新たな発見をしたときより、はるかに高鳴っている。ゆっくりと悠馬が振り向くと、その満面笑みの顔はさらにニヤニヤと頬を緩ませた。

「これは凄い……直視できないな」

「凄いのは彼女だよ」

「理沙が？何が凄いのかね」

「とても高校生には見えない」

身長と童顔のせいだろう。可愛らしい理沙は、はたから見れば高校生ではない。中学生でまだ納得できる。小学生といわれれば、否応なしに頷ける。だが、その言葉の口調から考えてみれば、確かにどこか大人びたところもある。

悠馬も、いま認識したばかりだ。

「凄いなあ」

「褒められた気がしないわ」

「どうでもいいが、チップを返してもらえないかね、君」

「出来ないなよ、片瀬さん」

あえてその名を呼ぶことで、悠馬は場を静めた。その言葉の重みに何を感じ取ったのか、雄一郎は首をかしげ、理沙は震えた。悠馬が帰ってきた喜びもあるが、何かよからぬ事態になっているとわかっているのである。

チップひとつでこれだけ大きな騒ぎになっているせいで、幻聴を聞いているのだろうか。父親が銃を握り、銃口を向けているという幻以外に、忍ぶように走る足音や金属同士が触れ合う重い音が耳に届いてくるのは気のせいだろうか。気のせいであってほしいが、だんだんと無言で近づいて来るそれは、現実ではないだろうか。

はつとした。今まで気にならなかったが、これは明らかに家の中の音。本来ならここにいる人数で全員だが、悠馬のほかにもまだ客がいるようだ。いや、ついさきほど来たようだ。静かに、そして着実にこちらに向かっている。

「面倒なものを呼んだらしいな」

「いやいや、呼んだのは僕じゃない」

手の甲を左右に振り否定する悠馬ではあるが、どこまでが嘘で、どこからが真実なのかわかったものではない。困っているのかどうかさえ、その表情から読み取るのは難しい。

スツと眼を細め、雄一郎の顔が厳しくなる。それでも悠馬は否定した。

「ならば、誰が自衛隊を呼ぶのだ」

雄一郎には、そこまで迫ってきた戦場のスペシャリストたちの存在に気づいていた。一度それで襲われているから、思いだしたのかもしれないが、この足の運び方と手馴れた動きは、自衛隊に他ならぬ。静寂しきった家だからこそ、彼らの足音がもれ聞こえるのである。これが日常生活であったなら、隣の部屋にいてもわからなかっただろう。それだけ彼らの忍びは素晴らしかった。

「おい、君」

「何？」

「チップを出せ。それさえあれば、簡単にやつらを蹴散らすことが

できる」

「ダメよ！渡さないで！」

「出し惜しみしている場合ではないぞ！殺される！」

「ママを殺そうとしたのはパパでしょ！」

「殺してない！動きを止めただけだ！」

「何よ、それ！ママがこんな状態になつて、パパはなんでまだ、それを持つているのよ！ママに何か声をかけてあげた？ママがパパではなく、あたしを求めるのはなぜ？パパなんか、嫌いよ！防衛のための銃だなんて、なら、それで……それでママを守つてよ！自分ひとりしか守ろうとしないなんて、ひどいよ」

「黙れ、理沙！さあ、君、さつさとチップを出せ！」

「チップなんて……チップなんか……」

「誰かを救おうなんて正義感はある自分を殺す」

「え」

何を、誰に言われているのか。理沙の理性は理解に苦しんでいた、まさか、優しげに微笑を浮かべている悠馬がこんな、突き放すような言葉を言っているとは思えず、仰天の表情で悠馬を見上げる。黒いコートだけが理沙の視界をふさいでいた。

「救えるのは、自分だけ」

「そんな……」

「くく、よく言ったぞ。見込みがあるようだな、君は！」

「違う……あなたはそんなこと言う人じゃ……」

「理沙」

銃口で狙われている以上、声を喉に詰まらせ理沙は黙ってしまふ。肩を怒らせ、荒い呼吸をしながら悠馬を睨みつける雄一郎を、とても父親とは思えなかった。どう足掻いてももとの優しい父には戻りそうもないと理沙は涙を飲んで、眼をそらした。

すぐるような目つきで見上げたいが、悠馬の表情は理沙を振り返るうとはしないだろう。理沙は母親同様、力なくそこにうずくまった。自衛隊が銃やら手榴弾やらを抱え持って、今しも攻めてきそうな緊

張感が張り詰めている。
なぜか悠馬は笑っている。

映画の撮影とは違うのだ。これは現実、幻聴でも幻影でもない。なのに、なぜ平然としてられるのだろう。雄一郎の手の銃がどんなに放射しても、何十人も自衛隊の銃にはかなわないだろうに、何がそんなに面白いのか。いや、面白くて笑っているのではないだろう。では、なぜ微笑を浮かべられるのか。この状況で。正気の沙汰とは思えない。

「正面から五人、リビングから十二、二階に三十隠れているな。それに、玄関から三人」

「わかるのかね!？」

信じられない。足音を聞いただけで、どこから攻めてくるかと人数とを同時に知ってしまう男がいるとは、さすがの自衛隊でも二階に潜伏した人数までは数えられまい。足音だけでは、不確定のはず。だが、悠馬の言葉が嘘偽りではない証拠に、玄関を通って、あるいはリビングの窓から、人の気配がする。

半歩後退した雄一郎の足　車椅子のタイヤが、壁にぶつかった瞬間、理沙の悲鳴と耳を劈くような銃声とが重なった。

第五話：影

真っ暗で何も見えない。

ぎゅっと目を瞑ったままなのだ気づくまでに時間を要した。気づいたところには銃声も止み、悲鳴や足音も聞こえなくなっていた。

静寂。

薄っすらと開いた理沙の視界の中に飛び込んだのは、車椅子転がった父親と、立ち尽くす自衛隊、宙に浮いた銃弾、そして闇を纏った天使。

悠馬はニツコリと笑いながら、魚のように口をパクパクとさせる自衛隊たちに手を伸ばす。小さく悲鳴を上げたのは、鍛え抜かれた精神を持つといわれる自衛隊だろうか。だが、自衛隊でなくても、この光景には度肝を抜かれる。

発射された銃弾は、着弾することなく、宙にとどまったまま。

雄一郎は矢神しているようだが、一つの傷もついていない。誰の血も流れなかった。宙で静止したままの銃弾は、すべて矛先を、唯一立っている悠馬へと向けていた。理沙も雄一郎も姿勢が低かったので、狙いを悠馬に定めたのである。だが、どれも悠馬の肌を傷つけることが出来なかった。

「なぜ……」

もっともらしい質問をした自衛隊員へ、悠馬はそつと笑いかけた。目を伏せるようにして視線を落とすと、そこに広がっている黒い闇を見ていた。

影。

悠馬の影。

そこにいた誰もが、現実を離れ、この世ではありえない光景を目にした。それを真実として記憶するかどうかは、脳が正常な判断を下せるかどうかにかかっている。

悠馬を中心として円状に広がった黒い影。人型をなしているのでは

なく、自在に形を変え、円状に広がっているのは事実か。そして、その影の上では、たとえ空中であっても、その範囲に入ったものは動きを支配されている。発射された銃弾は、黒い影に目をつけられ身動きできずにそこで停止したようだった。小さな銃弾の影は、黒い影の見えない触手に、捕まったようだった。おかげで悠馬には届かず、誰の血も流れない。けれども、流れているはずの血が凍った。

たった一撃で人間を死に追いやるはずの弾は、何十発あるうとも、たった一人を殺すことができないどころか、中途半端に宙に停止したのである。自衛隊の仕業ではない。平常な人間に、なせるわけがない。影が円状に広がったのは錯覚としても、銃弾が空中で停止しているのは錯覚では説明がつかない。

サツと悠馬の手がふられると、銃弾が廊下にバラバラと降ってきた。円状の影は、いつの間にか悠馬の影に落ち着いている。幻としか、思えなかった。

「な、なんだ、今のは……俺は夢を見ているのか……」

「いえ、リーダー、じ、自分も、見ました……」

ごくりと息を飲んだ音が、聞こえてくるようだった。それなのに、あいかわらずの悠馬の暢気な表情がそこにある。恐ろしいものに見えた。

「今のは、貴様の仕業か？ いや、何者だ、おまえは」

「そつちこそ」

「我々は……国の要請で来たものだ」

「自衛隊が動くほどか。国は発砲まで許したのかな？ いきなり、民間人を撃って、良心がとがめない？」

いきなり説教をはじめめる男に、自衛隊員たちは顔を見合わせ、おかしな状況の理解を急いだ。けれども悠馬の顔をみると、何がなんだかわからなくなってしまう。

「人様の家に勝手に入り込んでくるなんて、何様のつもり？」

片瀬家に不法侵入したのは、回答に戸惑う自衛隊ばかりではなく、

悠馬もである。誰も指摘しなかったのは、雄一郎が気絶しているのと、理沙が口が聞けなくなるほど驚愕しているせいだ。

精神を鍛えられた自衛隊は、すぐに自分たちの使命を思い出し、銃を奮い立てた。今度こそ悠馬に狙いをさだめ、発砲寸前で動きを止める。

「動いたら、撃つ。その前に、質問に答える」

「聞きたいことなら、こっちにもある。さっきも言ったけど、君ら、自衛隊だろ？日本国民を傷つけることとして違法にならないの？ずるいなあ、僕も国の後ろ盾が欲しいな」

「これは上からの指示だ。片瀬雄一郎の身柄確保ならびプロジェクトに関わった人物全員の暗殺」

始めから、悠馬を殺す気である自衛隊は、軽々としやべり出していた。さっきのは気のせいで、今度こそ悠馬をしとめられる自信がある。これまで培って来た努力が、あんな幻想に破られるはずがないと彼らは意気揚々と銃を構えている。だんだんと気が落ち着き始めると、もうおかしな現象のことはただの過去として捕らえられるようになる。

「貴様が雄一郎を庇い立てるといふのなら、おまえを雄一郎の犯罪に手をかした人物として、こちらは捕らえる。悪いが、容赦なく撃たせてもらうぞ」

「別に庇ってない」

「こちらの判断だ。従ってもらおう」

「一方的だな」

とはいえ、四方八方から銃を向けられている以上、悠馬たちには逃げ場がなかった。大人しく退散した方がよさそうである。だが、逃げられそうにもなかった。

動こうとしただけで、銃口が牙を剥く。どちらにしても、結局は悠馬たちを殺す気である。

「質問してもいいかな？」

「この際だ、聞いてやる」

「君たちの後ろ盾は日本そのもの？」

「そうだ。日本は他国相手に第三次世界大戦を勃発させようとしている。無論、日本はチップの力を借りて勝利を得る。チップがあれば、戦国時代の日本統一よりも現代の世界統一の方がずっと楽に行なえるからな」

「ひどい話だ」

そうは思っていないような口調に、自衛隊のリーダーと呼ばれる男は苦笑する。謎めいた部分の多い悠馬の面白さを知ったのだ。のんびりとマイペースな性格を笑ったのではなく、その性格があまりにも悠馬に似合っていたから、笑えたのだ。悠馬そのものだといえる。たとえ世界が炎で焼き尽くされようとも、悠馬だけは笑顔絶やさずに立っっていそうだ。朝起きたら顔を洗うのと同じく、悠馬がそこにいるのは当たり前だと、きつとそう思うだろう。

「おまえのようなやつが、雄一郎に加担していたとは思えんな」

「加担なんてしてない。ちょっとした知り合いなのさ」

「どういう知り合いだ？ 研究員仲間だろう？」

「冗談じゃない。ついさつき、そこで話したばかりさ」

「……知り合いとは言えまいな」

「なら、見逃してよ」

「できない。一応、おまえが何かの情報を隠し持っているとも限らないから、ここで処分することにする」

「何もないよ」

「いま、俺が言葉にしたことを聞いただろう？ それだけでも、十分情報を持っていることになる。チップに関する記憶はすべて抹消せねばならないのだ」

「チップの話なんか、さっぱりだよ。とりあえず、兵器になるらしいけど、実物は見たことがないし」

「チップが存在すると知っただけでも抹殺するに値する」

「まったくもって、ひどい話だ」

自衛隊長はゆっくりと近づき、銃口を悠馬の額にぴたりと押し合え

る。確実に仕留めるには、こうする他ない。逃げもせず、怯えもせず、悠馬はリーダーの瞳を覗いていた。

悠馬の男女とわず見惚れてしまう美しさに、思わずリーダーはたじろいだが、決して視線をそらすことはしなかった。

「さきほどのように変な術を使っても無駄だぞ。この距離なら、外さない」

「弾が出ればね」

「出る」

そう信じて指に力を込めた。

銃声は　上がらなかった。空弾ではない。カチリ、という引き金を引いた音すら誰にも聞こえなかったのである。何の音もしなかった。

リーダーは指を引けなかった。引き金に込めた力は、自らの意志に反し、引き金を引かなかった。それ以上進むことを躊躇ったのではなく、なんの前触れもなしに石化した。

指だけではない。全身もまた、思い鉛が負荷されたように、動かなくなってしまう。目の前で微笑む悠馬が、悪魔に見える。

「弾が出ない銃は捨てなよ」

すると自衛隊長の手は、銃をぱとりと落とした。隊員たちが愕然とその様子を見ている最中、隊長は歯を食いしばって、何かに耐えている。見えざる攻撃が隊長を苦しめているようだった。

すぐさま、銃口が悠馬に向けて発射するかに見えた刹那、自衛隊員たちもまた、隊長と同じく全身の自由を奪われた。意思とは別に銃を取り落とし、焦燥を隠すことができなかった。自分の意思ではない、銃を落とすなど、したくなかった。

黒い巨大な影が自分の影とつながっている。いや、自分の影の方が巨大な影に飲まれている。その影がひとつとなり、悠馬のすらりと伸びた足先に繋がれていた。

まるで意志をもった黒い影　魔影を操る魔人のごときその畏怖なる存在に、そこにいたすべての人間が恐怖を抱いた。

逃げられない。

緊迫の状態が続き、さすがの自衛隊も持久に耐えかねた時、影はフツとその姿をもとのサイズに戻した。

だが、誰も自分の足でたつていられるものはなく、みな、へなへなと崩れ倒れる。やはり立っているのは、悠馬だけ。いや、壁にもたれつつではあるが、リーダーと呼ばれた男もかろうじて立っている。屈辱に震えるその目は、困惑と憤怒が混合されている。

悠馬は新たなる敵を見つけたのか、視線は自衛隊ではなく、別の方向を見ている。廊下へつながる扉とダイニングルームに通じている通路とあるが、悠馬は前者を見つめている。しまつてはいるが、その扉の向こうに立つ人物が悠馬には見えるのかもしれない。少しだけ家の内部温度が下がる。

「歩ける？」

ガクガクと震える理沙に尋ねたのだと、数秒してからわかった。

答えるだけの力もなく、すぐに理沙は父親と一緒に気絶し、母親の上に重なってしまふ。

やれやれ、と肩をすくめた悠馬は、すつと両手を上げる。すると、自衛隊長とその隣にいた体つきの良い隊員二名が、すつくと立ち上がり、いきなり理沙、理沙の母親、雄一郎とをそれぞれが担ぎ上げたではないか。

「な、なんだ、これは！どうなっている！」

「まあまあ、落ち着いて。リーダー」

「貴様に呼ばれる筋合いはない！つち、なぜ俺が片瀬を運ばなければならぬのだ」

「人手不足なんだ。協力してくださいよ、自衛隊でしょ？」
彼ら自衛隊の影が、悠馬の影と繋がっているのを誰も見たものはいない。

ただ、自分たちの仲間が、罪人である片瀬一家を、処分目的ではなく確保しただけに過ぎない。しっかりと担ぎ上げたあと、そのまま、悠馬の後ろについて行くのを見届けてもなお、信じられる光景では

なかった。

扉は閉まった。静けさがこの家に戻る。

呆然とした彼らに、自衛隊本部から引き上げ命令があったのは直後のことである。必死の声は、片瀬邸の周囲を監視するレーダーに異様な発信と未知なる生物の影が現れたとの報告をしたが、いま、目の前で奇妙な光景を見た彼らには、どうでもいい話であった。

数秒後、この豪邸が、象に踏み潰されたようにぐしゃりと押しつぶされ、破壊された。

第六話：知る者

人通りの少ない裏道を抜け、悠馬は一人、歩いていった。悠馬の影に操られていた自衛隊や、それに担がれた雄一郎や理沙は一緒ではない。

一人である。

とぼとぼと、昼寝帰りの散歩でもしているかのようであった。

その後ろからそつと歩み寄り、悠馬の速度にあわせて前進する男がいる。あきらかに悠馬を尾行している彼の存在に、悠馬も気づいている。だが、相手にしない。相手にすれば、厄介なことが始まると思われるのだろう。

奇妙な散歩が続く。

突如、うららかな平和が壊され、悠馬へ向けて冷気が降り注がれた。大きく後退した悠馬の視線の先で、立っていた場所の電柱がくの字に曲げられているのと、その周囲のアスファルトやコンクリートの塀が無惨に崩れ落ちているのを黙認できる。

片瀬邸を破壊したよりも規模は小さいが、同じやり方である。見えない重圧に押しつぶされたような痛々しい光景が残った。

「見つけたわよ、紫影悠馬」

背筋が凍りそうな冷たい声が正面からまっすぐに当たった。太腿がむき出された真赤なスーツを着ている。膨らんだ胸は、第三ボタンまで外されたシャツの向こうで、悩ましげに揺れていた。男なら触れてみたいと思うのが当然であるが、悠馬は登場した美女を正面から見据え、かきあげられた長髪から覗かれた両眼と挨拶を交わす。美女の真紅の口元が持ち上げられる。

「和雄が言っていたよりもずっと美男子ね、あなた」

和雄。その名が出てくるといふことは。

「私は浦城さなえ。和雄の母よ」

「どうも」

二十歳を越えているであろう和雄の母親にしては、若すぎる。それに、美しい。和雄のガールフレンドだと言っても通じる。母親もまた、何らかの研究が生んだ結果により若さを保ち続ける方法を手にしているのかもしれない。

だが、若々しい肌を保持するさなえが見惚れてしまうほど、悠馬は美しかった。片手を自分の豊満な胸にもっていき、勝手に揉み出したが、それはさなえ自身の意志ではなく、無意識だった。ふう、とため息ついて手をはなすと、さなえの瞳はらんと輝く。

「強敵の出現ね」

「まだ何もしてないけど」

そのとおりである。まだ、視線をかわしただけ。

「年上の女を相手にしてみない？サービスするわよ」

「何のことやら」

「私をちゃんと見なさい。ほら、いかが？」

「用がないなら、帰ってもいいかな」

「ダメなのね。あなたほどの男の前では、どんな美女も色褪せてしまう」

くるりと踵を返し、すでにさなえとは反対の方向へ歩き出した悠馬に、さなえの悩ましいため息は届かなかった。

「待ちなさい」

見えざる壁が、振り下りてきた。あと一歩先に進んでいたら、悠馬は地球の倍の重力で地面に潰されていただろう。

「用件はわかっているのでしょうか？出しなさい」

「何を？」

「もちろん、片瀬雄一郎が開発したプログラムチップよ」

「そんなもの知らないよ」

「とぼけるのがお上手ね。いえ、もともとそういう顔なのかしら」

「失敬な」

「でも、あなたが持っているのは知っているの。どこへ隠したの？隠し場所だけでも教えてもらえないかしら」

「ノーコメント」

「無駄だよ、母さん。そいつは仕事を受けた以上、絶対に隠したものを渡さないし、隠した場所だって教えないさ」

新たな声は、悠馬の隣からであった。壁によしかかっていた身体を起こし、ゆっくりと悠馬に近づき、距離をあけて止まる。その先に進めば、悠馬の黒い影を踏むところであった。その影が自ら動き、人間の動きを支配してしまう魔影であることを、その男は知っているようである。ギラギラと輝く彼の瞳は、悠馬の影とそれから悠馬自身に、大変興味があり、ここで出会った喜びを祝っている。

奇妙な散歩の付添い人 ではない、付添い人はまだ悠馬の背後で、再び歩き出すのを待っている。

「辰雄。母さんが先よ」

「別に手は出さないさ。好きにしなよ、どうせ勝敗は見えてるから」

「母さんが負けると言いたいのかしら？」

「そのとおりさ。負けるよ、母さんは」

「……辰雄、あなた、何か知っているようね」

「母さんや兄さんが知らないだけさ」

辰雄は悠馬から視線を外さず、どんな些細な動きも見逃さないようにしている。悠馬はジツとそこに立ったまま。

何か二人の間に入り込めない雰囲気生まれ、さなえは激しく嫉妬した。

「辰雄、母さんにもわかるように説明しなさい。その色男が何者なのか、あなたの好きなSFとどう関わっているのかね」

「フィクションなんかじゃないってことさ、母さん。それに、兄さんも」

「お、バシてたか」

ひょいっと破壊された壁の向こうから、姿を現したのは、和雄である。家族に連絡を取ったあと、また悠馬のあとを追いかけていた。

母親と弟も、集合していたとは思わなかったが、片瀬の家を見張っていれば、当然の結果である。

「母さん、片瀬の家まで壊すことなかったんじゃないか？」

アレは母親の仕業であると、いま、はっきりとわかった。さなえはあれだけの豪邸を押しつぶした偉業を自慢するかのように、妖艶にほくそ笑む。

「私たちの家庭は、あの男によって壊されたのよ？ いいじゃない、家くらい。邪魔な自衛隊も始末できたし、一石二鳥というものよ」

「そんなもんかねえ」

「そんなものよ」

でも、とさなえは冷たい眼差しを悠馬に落とし、顔にかかった髪をかきあげる。

「あなたも一緒に押しつぶすはずだったのよ、紫影悠馬。まさか、私の重力を操る力が気づかれていたとは思わなかったわ」

玄関に大きな殺気を感じし、異常な力が豪邸を包みつつあると察知し、裏口を使つて外へ逃げ出した悠馬。豪邸をつぶしたあと、悠馬や雄一郎がいらないのに気づいたさなえは、周囲を探り、悠馬がこの裏路地へと抜け出たのを知り、追跡を開始した。

「和雄から油断するなといわれたけど、油断してしまったようね。」

重力を倍化させる位置が、まるでわかっているんですものね」

だから、今、悠馬の足は止まっているのである。さなえの作った重力の障壁は、悠馬の目の前にそびえ立っていた。

「筋肉強化した俺のスピードにもついてきたぜ、こいつは」

「たまたまだよ」

「魅力的だわ。強い男つて好きよ？ 紳士的で。でもね、我慢しないでいいのよ？ 私の体に興味がないなんて、言わないでしょ？」

「年増のババアが厚化粧したつて、わざわざそんな短いスカートにしたつて、興味あるなんて言わないと思うが」

「……和雄、それはこの男がどんな美女を前にしても手を出さない、とそういつているのよね？」

「そうとも。母さんが自分の年も考えないで馬鹿なことしてる、なんて思つてないさ」

にっこりと微笑むこの母と子、どちらにも猛毒が乗ったトゲが覆い隠されている。

「……ますます確信をもてたよ、母さん、兄さん。紫影悠馬の強さは人間離れしてるってことがね」

毒の盛られた刺以上の武器を隠し持っているような奇妙な笑みを浮かべながら、弟は悠馬を眺めていた。片時も目を離さない。まるで監視しているかのようだった。

「人間離れしてるのはわかってるぜ。俺は闘ったんだからよ」

「ならわかるよね、兄さん。こいつが影を使う死神だってことが「影？」

「教えたじゃないか」

クスクスと自分だけ知っているとという優越感にひたりながら、得意げに語りだされる知識は、人間である辰雄の知るかぎり、人間でないものにとっては当たり前の常識であった。母親のさなえも、兄の和雄も、確かに辰雄から話を聞いている。聞いてはいるが、人間離れした常識を知悉するにはまだまだ、時間が必要だ。

「この街の地下に妖魔たちの巣くう世界があるなんて、普通の人間なら知らないさ」

「なんでおめえは知ってるんだよ」

「知ったんだよ。ある日、突然ね。そのとき、“隠し屋”の話も聞いたのさ」

「隠し屋？」

「そういう職業さ。それが君の仕事だろう？紫影悠馬」

「まあね」

悠馬は笑っているようだった。声は出さず口元に乗せた笑みだけであるが、十分に辰雄を愉快的気分させた。

「その隠し屋を名乗る者たちの中でも、凄腕のやつがいる。そいつが仕事の依頼を受け、隠したものは、二度とこの世に出てくることはない」

「隠し屋となつたなら、そうするのが普通だ」

「だけど、結局は銃で脅されたり、金や地位で強請られたりして、隠し場所を売ったやつもいる」

「隠し屋失格だね」

「君は違うんだろう、悠馬。君は最高最強の隠し屋だ」

「いやあ、それほどでも」

かなり嬉しそうに微笑む悠馬を見ていた浦城一家は、自分の胸の鼓動が異様に高鳴っているのを聞いた。止めようがなかった。

鼓動が静まるのを待って、辰雄はまた話し出す。

「死の影を操る男がいると、彼こそが実力ナンバーワンの隠し屋だと噂がある。死の影を操る、だから名前は死影。本当は紫に影で、

紫影。紫影悠馬だ」

「変な覚え方しないでもらえる？」

「噂だと言っただろう。僕が言い出したんじゃない」

「その噂、消して欲しいなあ」

「裏世界じゃ根付いているから、もう無理だろう。けど、噂なんて曖昧だからね。僕はいま、君に会ってこの噂の断片をつなぐことができたけど、本来なら、凄い隠し屋がいる、死の影を操る男がいる、紫影悠馬の名に気をつける、とか別々のものだから」

辰雄はそれらを、なぜ悠馬と結びつけたのだろうか。いくらでも強力な妖魔や人間の噂がある。なのに、なぜすべてを悠馬に結びつけたのか。和雄の話でその人外の力を知った、だが、影の力までは知らなかったはず。

なぜ。

答えは足元に広がっていた。

翼を広げた黒い魔鳥は、辰雄、和雄、さなえの三名の影をしつかりと捉えていた。気づいたときにはもう遅し、さなえの美貌はしわでゆがみ、和雄は足を動かそうと暴れているが腕が振られているだけだった。

ひとたびその影に捕まってしまうえば、影だけではなく、本体をも自由を奪われてしまう。だというのに、辰雄はにやりと口元をゆがま

せた。

「これが“影踏み”なのか」

「そう、影踏み」

「相手の影を踏むことで、相手そのものを操ってしまうわけ。捕らえられたものは、抜け出すことができない」

「わざわざ説明どうも」

「待てよ、辰雄。それなら、俺たちはこのまま、逃げられないってことか!？」

「そうなるね」

「おいおい」

身体を捻ろうにも、指を折り曲げることさえできなくなった。眼球を動かすこと、会話と呼吸をすることのみが許されている。しかし、もし、悠馬が影に何らかの力を加え、それらも彼らから奪ってしまえば、残された未来は、死。死を簡単に与えることが出来る影、死影と呼ばれる由縁なのかも知れない。

ところがその影が、すっと身を引いたのを和雄は驚きの目で見ていた。さなえは声も出せない。

人間以外の力が働く裏世界を知った辰雄だけが、微笑を浮かべることが出来る。

「やはりね。君には僕らを殺せないことがわかっていたよ」

「殺す理由がない」

「俺たちは、おまえを殺すかも知れねえってのにか? お優しいこつたな」

「素敵な男。私、再婚を考えようかしら」

「よしてくれ。こんな優男」

「僕も反対だよ、母さん。こんな恐ろしい男」

ぎらついた瞳を伏せ、辰雄は両手をポケットに入れた。ふて腐れたようにも見えるこの行為を和雄はじっと見ていた。さなえは、妖艶に微笑む。

悠馬はチラリ、と背後を見た。先ほどと変わらず、一定の距離を保

つて、尾行していた男がそこに立っている。沈黙を守ったまま、悠馬を凝視する。

「チップを渡してくれないか、悠馬」

「断る。隠し屋のことを知っているなら、僕の返事もわかるだろう」

「交渉決裂か、でも闘いたくないな」

「闘わなくていいよ。このまま、別れよう」

「そもそも行かない」

辰雄の左手が飛び出すと同時に、その手には緑色に発光する液体が充滿する試験管が握られていた。見るからに嫌な予感の漂うそれを、辰雄は思いつきり地面へたたきつける。

液体が散った。

散った液体が辰雄の体にこびりつき、そこから体内へと吸収される。液体の異臭が鼻をつき、悠馬の眉がひそめられる。それでも目を背けられなかったのは、急速に変貌して行く辰雄が、危険因子であると認識したからに他ならない。

和雄とさなえは、悠馬から離れ、その光景を見守っている。手をだそうとはしなかった。

「左を出したか。右でもいいと思うがね、俺は」

「ひどいわ、辰雄。母さんが先に遊びたかったのに」

二人とも声が笑っている。緑色の液体を吸収した辰雄がやるうとしていることが、楽しいらしかった。それで悠馬を倒せると思っっているようだ。

左右の腕、血管が浮かび上がるほどの筋肉が盛り上がる。肌の色も黒く変色し、服が干切れ飛ぶ。破裂しそうなそれをブンツと振るだけで、空気が唸り、風が生まれた。

すぐに両足も筋肉が膨れ、辰雄は一回り大きくなった。軽くジャンプただけで、十メートルを跳ぶ。兄の和雄と同じく、筋肉強化剤を飲んだとも言っのか。

筋肉の発達により、スピードを増すのは兄の薬。

では、弟は。

瞬きした瞬間に、辰雄は悠馬の背後へとまわっている。豪速球のパンチを繰り出す、空振りした。

「避けた」

「まだまだ」

さらに逃げた悠馬を追いかけ、拳を振るう辰雄のスピードは、和雄と互角、それ以上のものである。スピードだけではない、攻撃力すら上げてしまうのが辰雄の持っていた薬だ。さらに。

銃声が鳴り響いた。いつの間にか悠馬の手に握られていた銃は、自衛隊から盗んでおいたサブマシンガンであった。

けれど悠馬は、すぐにそれを捨てた。役に立たないとわかったからである。

辰雄の薬は筋肉強化、極限まで固くなった筋肉は、銃弾を跳ね返す。おそらくは剣で立ち向かってても、剣の方が折れてしまう。

降って来た拳を避けるため、悠馬は跳んだ。

「さて、どうしようか」

「影に捉えられないスピードがあれば、安心。さっき放したのが命取りってやつさ」

「また捕まえればいい」

「捕まえられるわけがない」

「そうかな」

「ところで、さっきの銃について聞いてもいいかい？」

横から伸びてきた蹴りに跳び乗り、それを踏み台にして塀へ上った悠馬は、不思議そうに顔を上げる。第二撃を加えるために飛び跳ねた辰雄が、目の前にいた。

「おっと」

「あの銃をどこに持っていた」

「おや？」

破壊された塀を飛び越え、悠馬は再び地上へと戻ってきた。着地点を狙って攻撃を加えることも可能であったろうが、両足そろえて立っただけでも、辰雄は攻撃しなくなった。

よほど銃をどこから取り出したのかが気になると見える。

死闘を見守るさなえと和雄も、悠馬が銃を取り出した瞬間を見逃している。

「いつ出した、いや、何処に隠し持っていたのか」

「影踏みは噂になっていても、これは知らないんだなあ」

「言っただろ？断片的な噂しかないって、それを僕は自分なりにつなげただけだから。知らないうわさをつなぎ合わせることは出来ない」

「知らないなら知らないって言いなよ」

「銃をどこに持っていた？」

次に笑ったのは、悠馬だった。ムツと顔をしかめた辰雄とは違い、たとえ攻撃の隙が見出せなくとも、まるで悠馬が優位に立っているようである。

「自衛隊からもらったんだよ」

「銃の持ち主を聞いたんじゃない。自衛隊からもらったその銃、闘う前は持っていないなかったのに、なぜ今はそこにある？」

投げ捨てた銃は、そこに転がったままであった。

そつと辰雄の手が右ポケットに進み、新たな武器を取り出そうとしている。そこに何があるのか、和雄やさなえは知っている。知っているからこそ、笑っていられるのだ。

だが、まだ一撃も受けていない悠馬には余裕がある。銃を隠し持っていた場所を試験管一本出てきたからといって、浦城一族に教えるとは思えなかった。

「悠馬、君を捕獲する。それだから、銃が出てきた場所も、チップを隠した場所も聞き出すでしょう」

「あ、逃げようかな」

曖昧な言い方。だが、悠馬はすぐさま行動に移した。飛ぶように跳ね上がり、滑るように走り出す。瞬発力が増加されている辰雄や、筋肉強化剤を持っている和雄から、逃げるには遅すぎるスピードではあったが、二人とも動かない。

かわりに、さなえが右手を振った。

見えざる壁が、重力の変化により、重圧となってアスファルトにめり込むと、悠馬の足を容易く止める。それ以上先に進めば、悠馬のからだは潰れ、心臓が破裂するだろう。逃げられない。

第六話・知る者（後書き）

ここで終わっていますが、すぐにつづけます。あえて止めてみただけです（笑）

第七話・血に飢えた獣（前書き）

できることならば、第六話を読んだあと、続けてご覧下さい。さらに言えば、第一話から続けて呼んでくださると、面白さも倍増するのではないのでしょうか？

第七話：血に飢えた獣

血の気のない肌、ぼさぼさの髪、ただまっすぐに悠馬を眺める男がそこに立っている。さなえが作る重力の結界にも、全身を変貌させ異形な生物となった辰雄を前にしてもなお、この男は悠馬と散歩を再開できる機会をうかがっているのだろうか。

辰雄は取り出した右手の試験管を破壊、またも液体を肌から吸収する。今度の液は赤い。血液のような鮮やかな赤い液体が、体内へ入り込んでいった。どんな効果があるのか、辰雄の顔に笑みが広がる。逃げられない悠馬、背後にはさなえの作る重圧の壁が控えている。懐から取り出した注射器を、和雄は何も言わずに打った。参戦する気だろう、ナイフはすでに磨いである。

何を考えているのか、悠馬はこの状況であつても、のほほんとした表情を変えずに、のんびりと構えていた。ちらり、と背後の男を振り返るのは、彼もまた散歩を再開したいと思っっているのだろうか。

「今日は自衛隊が相手だと思っっていたから、これしか持っていないけど、攻撃する気がない君を捕まえるのは簡単だ」

「君らが攻撃してくるんなら、僕も動く」

悠馬の影は、地上で沈黙を守っている。だからといって安心はできない、そのスピードならば、いつどんなときに姿を変えて刃を向けるとも限らないのだ。裏世界を少しなりとも知っている辰雄は、悠馬から目を離すまいと視界から離さずにいる。

だから気づけなかったのかもしれない、もう一人の存在に。浦城一族は、悠馬を意識しすぎていた、悠馬に視点を置きすぎだ。

赤い液体を吸収した辰雄の体に、変化が起きていた。その変化を視界の隅で眺めながら、正面から切り込んできた和雄のナイフをかわす。

腕が一本増えた。腹から、異様に長い腕が辰雄の腹から飛び出してきた。液体を吸収する前の辰雄は病弱な青年に見えるが、今の辰雄

は筋肉質の塊だ。ギャップの激しさに、兄は愉快気だった。

「あれは辰雄のオリジナルだ。親父の真似して化学実験をやったな。変わった弟さ。けど、それが今、役に立つ」

「君のも弟君が？」

「いや。これは親父が作ったもんだ。母さんの力も親父に実験台にされて植え付けられたもんさ」

「ほお」

「母さんはひどいぞ、ちよつと怒っただけで内臓がつぶされちまう」

「何だか、君ら三人のうち、君だけ人間らしく見えるよ」

「お、同情してくれるか？」

「するする」

「だよな。俺もどうせなら、空飛ぶくらいの武器があれば同等に見えるんだけどな。今のままじゃ、下っ端みたいだ」

考え方は立派に常人ではなく、化け物扱いされてもおかしくないだろう。薬で素早さをあげているが、弟が人間ではない姿になっているが、母親が人間外の力をもっているが、すべてを受け入れて、なおかつ力を求めて殺戮を繰り返すとは、人間としての正常な判断能力を失っている。失っているが、ただの狂人ではすまない。死んだ父親の死体が野晒しになっっていないことを祈ろう。

シユツと横を通り過ぎるナイフの刃先に、悠馬は身をかがめた。

「避けてばっかだな。そのうち、辰雄の変身も終わるんだ。そんときじゃ、おまえも死ぬ。もう少し俺を楽しませてくれないか？あんな、強いんだろ？」

「血は見たくないんだ」

「はン！ふざけんじゃねえよ、おめえは何度も死体を拜んでんじゃねえのか？それも全部、おまえが手を下したもんだろ？なあ、俺にも見せてくれよ、その影の技」

「さつき見ただろ？あれが何人も命を奪った技さ」

「ほう、否定しねえのか？自分は人殺しじゃないって」

「好んで殺すわけじゃないさ。正当防衛だよ」

和雄のナイフ捌きは彼自身が学んだ術だろう。薬もなし、実験もなしの彼自身の力。身のこなしとナイフの握りは、何十年も殺し屋を殺ってきたやつらにも匹敵する。鋭い刃先は常に悠馬の急所を狙い、ついてくるのだ。心臓を直接狙うのではなく、首、目、手や足など、攻撃が通れば、確実に相手の動きを止められそうな場所を狙ってくる。まずは相手の動きを止める、それでからじわじわと。

ナイフを握る和雄の表情は、実に楽しそうである。まったく、とんだ殺人家族もあつたものだ。

「正当防衛か。そんな気がするな、あんたが仕掛けるんじゃない。あんたの強さが勝手に周りの連中をひきつけるだけだろう。戦いたい、勝ちたい、ただそれだけで勝負を挑まれたこともあつたんじゃないのかい？」

「君の知らない世界は、そういう世界だよ」

「へえ、四六時中ケンカしたい放題ってか」

「血の気の多いやつらばかりさ」

「そんなやつらが、この街の地下にな。見たことない、どう行つたんだろうな、あいつは」

ふと和雄の目が細められた。弟を思う兄らしい表情を見せたのだが、悠馬の表情は変わらず、何も返事を返さなかった。

「和雄！何をしゃべっているの！私より長くその男と話してんじゃないわよ！」

「うるせえなっ！横から邪魔するんじゃないやねえよ！」

「邪魔？どうせ当たらないんじゃないの、そのナイフ。あんた、引きなさい。辰雄の番よ」

腹から生えた腕は五本に増加している。おぞましい光景であり、気持ち悪い光景だ。黒ずんだ人間から腕は計七本、もはや人間ではない。

「紫影」

「ん？」

「チップを出せ」

「断る」

「あのチップをださねえと、おめえは殺されるぞ」

「心配してくれてるわけ？」

「……チップに関心寄せてるのは俺たちや自衛隊だけじゃねえんだ。今のうちに戦線離脱したほうがいい」

「世界征服をたくらむ男のセリフとはとても思えないね」

「ふん。おめえの死体が見たくないだけだ。おめえは世界の覇者となった俺の世話係だ」

「おい、こら」

むつと膨れた悠馬も、さすがにこれには怒ったらしく伸びてきた和雄の腕を交わしつつ、肘を下から叩いてナイフを落とさせると、足を薙いで和雄の体を倒そうとする。が、そこまではうまくいかない。悠馬の蹴りは和雄の凶体には響かず、無力なばかりか逆に足首つかまれてしまう。

咄嗟に和雄の落としたナイフを掴んだが、それは何の脅しにもならない。和雄はまだナイフを倍以上持ち合わせている。

「ポケットか？」

ぶらんと悠馬を逆さに持ち上げ、和雄はぶんぶん振り回したが、チップは出てこない。さなえは何しているの、と飽きれているし、辰雄は自分が場所を吐かせると意気込んでいる。それにこまわす、和雄はチップを探したが、どこを探しても出てこない。

「無いぞ、どこに隠した？」

「だから、言えないってば」

「兄さん、僕がやる」

「同じだ。おまえがやっても、俺がやっても、こいつは持ってねえ」
「ならどこに隠したのか吐かせてみせる」

「はかないだろうぜ、この男は」
「そうとも」

ナイフを一振り、和雄の手を切りつけようと。避けられたが、大きく振りかぶり、うまく手が離れるとびょんっと飛び降り、地上

に足がつくと同時に悠馬は疾駆する。向かう先は結界を作っているさなえ、彼女を攻撃すれば結界が壊れるはず。

だが、さなえの頬には微笑が浮かんでいる。ナイフを持っているとはいえ、向かってくる相手が悠馬だからという理由からではない。悠馬とさなえの間があと十メートルとなったとき、眼前に大きな壁が降って来た。

同時に前傾姿勢を後方へ倒し、後ろに倒れる体を丸め、片腕をバネにして支え、体を伸ばしながら大地を思いつきり押す。飛び跳ねるように後ろに回転した悠馬は、軽く着地すると、影を前方に広げて降りてきた影を捉えようとする。

「その速さは遅い」

悠馬の影に捕らえられるより早く、走り出したのは辰雄だった。アスファルトの地面に向けて拳を突き出す。大地震があったかのごとく、立っていらぬほどの揺れと盛りかえった道が壁となった。悠馬の影がその壁により前に進めず、さなえを完全に壁の向こうに隠してしまった。

停止した影を捉えようと幾本もの腕が頭上より伸ばされる。自分で作った壁を飛び越え、一瞬動きを止めた悠馬の肩を掴んだ。巨体となった辰雄の体重を華奢な悠馬の体が支えられるはずも無く、悠馬は背中から思いつきり押し倒される。

ようやく悠馬の顔に苦渋の面が浮かんだ。

それを喜んだのか、辰雄は雄たけびのような歓声を上げる。

「あの紫影悠馬だ、死神を殺すのはこの僕だ！」

「待て、辰雄！チップを」

「わかってるよ、けどその前に、手足が動かないようにしておかないと」

「こういうことになる」

ナイフを握る手に力をこめた悠馬が辰雄の手の甲に思いつきり、突き立てた。赤い液体のおかげか、皮膚は強化され、ナイフの刃ははじかれた。

再び辰雄の哄笑が響く。

「なんだ？何がしたいんだよ、紫影悠馬？」

「今にわかる」

悠馬の口が笑みに形どられると、辰雄の体は軽がると宙に持ち上がった。悠馬を捕らえるために動きを止めた辰雄の影を捉え、その影を使って辰雄の体を吹き飛ばしたとは、にわかには信じられないが、和雄はかすかに黒い悠馬の影が地上に盛り上がり、辰雄の影を投げ捨てたのを見た。幻ではない、確かに影は地上を這うという常識の殻を破り、地上に浮き出た。ようにみえたのだが、こうして見るとやはり、信じられない。今の影は、悠馬の足元でおとなしくしている。

低く攻撃態勢を保ったままの辰雄は、悠馬につけられた傷に目をやった。あれだけ勢いよく刺したように見えたのだが、深い傷にはならず、痛覚すら感じない掠り傷程度のもものとどまった。じんわりと滲むだけの血をぺろりと舐めとり、それだけだ。

「今ので僕に“影踏み”することもできたんじゃないのか？」

「まあね」

「余裕だなあ。ほかに何か僕に勝てる策があるというのかい」

「さて」

「あるだろう。君なら、いくらでもありそうだ。実を言うと、戦っているけど勝てる気がしないよ。今の僕は緑と赤の強化剤しか持っていないかったからね」

「残念だね。持つてくる暇無くて」

「暇が無いって？全然攻めてこない君を前に、暇を持て余してて困っているところなのに」

「攻めるのは僕じゃない」

伏せた悠馬の視線は、辰雄を離れ、和雄に注がれた。否、和雄ではなく、その向こうにたたずむ男に向けられた。さなえには何も見えなかっただろうが、和雄と辰雄の両名には見えたはずだ。

両手をつき、獣のような低い体勢とうなり声で威嚇する男を。ぼさ

ぼさの髪を逆立った毛のように怒らせ、獲物を見つけた肉食獣の目と同じく眼光を鋭く光らせる。

狙いは 辰雄の手。
駆けた。

目の前を通り過ぎたと認識したとき、和雄の周囲は嵐のような風が吹き荒れる。足がすくわれそうになり、踏ん張るのがやっとだった。「つく……」

腕をクロスさせて顔面を防御するが、鋭い風の刃が和雄の皮膚を叩く。耳に届く音は轟音、目を開くことはできても、顔を向けることはできなかつた。辰雄と、さなえと、そして悠馬に何が起こるのか。激しくのたうつ風はさなえを守っていた壁を脆くも破壊し、隠れていたさなえをさらけだす。それだけではすまない。重力を操る力を持つていたとしても、その標的がわからなければ、重力をどの位置に落とせばいいのかわからなければ、抵抗力の無いさなえはなすがまま、風に吹き飛ばされる。

「何だ、この獣は!？」

いつ、母親さなえの作った結果内に入ってきていたのか、辰雄は気づいていなかった。無論、悠馬を強敵としてほかに注意が散漫していたせいもあるが、何よりも、この獣と貸した人間の気配が皆無に等しかったがためだろう。

辰雄は腕を振るって獣を捕らえようとしたが、獣の動きは辰雄の強化された素早さよりも速い。桁外れだ。辰雄の腕が交差して風を掴む頃には、牙をむいた獣が背中で笑っていた。

血。

それが彼を刺激する要素だと、獣に変じさせる方法だと、知る者は誰か。

この街には人間の知らないところで様々な生き物が、人間同様に暮らしている。共存ともいえるのか。街の地下にある妖魔帝国もそうだが、この街にも何名かの妖魔が遊びにくることがあり、探してみると不思議な生き物が蔓延っている。ランドセルを背負った老婆も、

十字架の効かない吸血鬼のうわさも、死んでなお死を求めるソープ嬢なども、この街に住むものならば知るべきだろう。

この街は、ただの街ではない。

妖魔と人間、多くの場合、妖魔は人間と同じ空気を吸っているというのに、妖魔だと気づかれない。奇抜な服装をする若者、タバコや酒、麻薬にまで手を出して、正常だと思われていた人間の世界をまったく別の新世界へと変えてしまおうとする彼らは、それまでの常識を覆し、新たな常識を着実に作りつつある。葉っぱの売り渡して八十を超えた老人が丸儲けした話もある。

電子機械の発達に伴い、これまでの人間的思考を保ってきた者たちを追い出そうと、静かな攻撃が開始されていた。株の変動を操作するも易し、コンピュータウイルスによって殺人予告を世界へ発信されたこともある。

立ち並ぶビルやマンションなどのコンクリートの建物にはいつでも、その号令が下つてもいいようにささやかな爆弾が仕掛けられ、眼球ひとつで特定の相手の脳に話しかけられるようマイクロサイズの受送電信機が開発されたり、顔面を彩って自らを偽り欲望を満たすために手当たりしだいにピンクホテルへと寄り添って歩いていたたり、現代社会は大きく揺れ動きつつあるのだ。

今述べた例は、社会人だけではない。二十歳を超えていないもの、十代のものもいるが、幼稚園生だって一大企業を起こした噂もあり、その企業は中国マフィアとつながっていて、などと考えられない話に進み、実はその社長は妖魔だという結論にまで達している。

妖魔。彼らこそ、この街の新たな住人であるかもしれない。

獣に変わった彼もまた、新たな住人の一人と認識できる。のんびりと散歩していたが、獣と変わった彼は、散歩よりも食事を欲している。散歩は終わりだ。

これからは、狩りの時間。

微量とはいえ、独特の血臭を嗅ぐと体内の血流が勢いづき、細胞が活性化される。本能に近いものが彼を獣の姿に変貌させ、血を求め

させる。餌を見つけた獣そのものだ。ただの獣ではない証拠に、彼が通った後は凄まじい風が巻き起こる。これは脚力の発達が妖魔ならではのスピードを実現させているのに他ならない。人間たちは突風が来たのか、と顔を青くするが、その程度で済めばいいほうだ。その風のせいで死んだものもいるのだから。

事実、筋肉強化した和雄はそこに立っているのがやっとであり、さなえは風によつて五十メートルも吹き飛ばされ気絶している。相当この獣が血に飢えていると見える。

人間の姿を捨てた辰雄に、風の妖魔は抑えることができるのか。

「し……紫影悠馬!!」

背中に打ち込まれた牙は、痛覚を狂わせた。血潮が飛び散る。何度も何度も牙を剥き、背中につめを立てて、いくら振り払っても獣は辰雄の肉を引きちぎろうと狙ってくる。強化したはずの辰雄の皮膚でなければ、脊髄を噛み砕かれ、首と胴を引き離されていたろう。この獣を野放しにしておくとは、なんと危険な街か。

「紫影悠馬!!」

名を呼ぶ。だが、返事はない、いつのまにか、姿さえ消えている。さなえが吹き飛ばされたとき、結界も消えていたのだ。悠馬はさつさと退場した。

そうと知った辰雄は目をぎらぎらと輝かせ、背中に張り付いた獣を自分の肉ごと引き剥がし、地面に叩きつける。

目玉をくりぬき、右足、左足と骨ごと断つてもなお前足で飛びかかろうとしていた。執念深い、それだけに恐ろしい。牙から滴る血は、辰雄のものであった。更なる興奮が獣に痛覚を感じさせなくさせ、その生尽きるまで、得物に飛びついていくだろう。

だが、辰雄も化け物だ。

「逃がさない……紫影悠馬ああ!!」

ガツと口を開いて跳んだ獣の顔面を、両手のひらでバチンと潰す。頭蓋骨の抵抗もなく、獣の頭部は風船のごとく、簡単にピンク色の肉片を飛ばして吹き飛んでいった。ぐにやぐにやとした脳の一部が

辰雄の手についていたが、軽く払っただけで辰雄から離れていった。
風もやんでいる。

兄の和雄の姿が近づいてきたが、それよりも弟の辰雄が見ていたものは、どこか遠くに消えた美影身であった。

第八話：介入

目を覚ました理沙、雄一郎が見たものは三名の自衛隊が縄で縛られ、目隠しをされたまま、部屋の隅っこで転がされている妙なものだった。眠っているのか、誰一人声をあげない。

「ママ……」

母親も寝ていた。理沙のすぐ隣で、小さな呼吸を続けている。ほっとしたのもつかの間、叱咤が飛んできたので身を縮めた。理沙に対してではなかった。

父親雄一郎はちつと舌打ちして、懐に隠してあるはずの銃が二丁ともなくなっているのに腹を立てていた。

ここがどこだかわからない不安もあり、身を守る武器を探すのは当然としても、何よりもまず母親と娘の心配をして欲しかったと、理沙は父親をにらみつける。

それにしても、この寒い部屋はどこであろうか。灰色のコンクリートがあり、縄や工具が捨てるように置いてあるのが目に付く。部屋といったが、部屋といえるところではなかった。途中まで続けた建設が中止にされている状態だ。ここは廃ビルの中だろうか？窓となる部分は用意されているのにガラスは無く、そこから肌寒い風が通り抜けていく。窓ガラスがないなら、カーテンなんてあるわけない。とにかく、寒さをしのげそうなものはなかった。外の景色は青い空と白い雲。けれども、散歩したいような陽気な気分にはなれない。

「パパ」

「何だ」

「ここ、どこ？」

「わかるわけなからう。私も今日覚めたばかりだ」

「悠馬さんはどこかしら？いないみたいだけど」

「悠馬だと？あの美男子のことか？ふん。あの男が心配か？きつと

あの男が私たちをここへ閉じ込めたのだぞ」

「閉じ込めた？」

改めてあたりを見渡した寒い風を運んでくる窓の外は白い雲ばかり、高いビルが見えるからこの位置も高いのだろうということはわかる。出口はどこだ、と後ろを振り返ると、そこに扉がある。だがこの扉、どうも鍵がかけられていそうだ。理沙たちは自衛隊たちと違い、縄はかけられてないから自由に動ける。立ち上がって扉の開閉具合を調べるのも自由だった。結果、確かに鍵は外からかけられていた。

「しかし、あの男、何者だ？」

「悠馬さんのこと？」

「よくはわからんが、自衛隊が突撃してきたときのあの冷静さ、修羅場を抜けてきたような目つきをしていた」

「見たの？」

「……いや、そう思ったただけだ。あの男と目を合わせられるものなどいまい」

そうでしょうね、理沙は鼻を鳴らす。自分だってまだ視線を交わしてはいない、機会はあったが、なんとなく反らしてしまう。恥ずかしいのだ、こんな醜い姿をその黒瞳に映されるのは。その目に映るのはもつと美しいものではなければなるまい。理沙はほうとため息をつく。

早く会いたい。偶然道で出会っただけだが、理沙の胸に確実な思いが生まれている。仕事を頼んだはよいが、それっきり消えてしまうのも名残惜しい。だが今は、またここにきてくれるだろうと期待している。いや、会えるのだ。こんな閉じ込められた空間にいつまでも置いておくはずはない。何日かかってもかまわない、鍵を開きに、会いに来て欲しい。

「迎えに来たニヨン」

「待ってた……いえ、待ってないわ。あなた、誰よ」

タイミングよく現れた声に、笑みを投げた理沙であったが、外から

風とともにやってきたのは悠馬ではない。雄一郎の顔も引きつっている。

金更紗の長髪を風になびかせ、くねくねと体を左右に揺らす女だった。大きなブルーの瞳がそこにいる全員の顔をじつくりと眺め、目的の人物を探している。

「あニヤ？もしかして、あれかニヤア？」

足音なく部屋の隅へ移動し、縛られたままの自衛隊の前でしゃがみ込む。縄を解いて助けよう、とはしない。角度を変えながら、しばらく眺め、それから大きく頷いた。

「たぶん、君たちだニヤ。さ、帰るよ。総司令部長殿がおまえらを探してるニヤ」

「ま……待て」

「うニヤ？何かしゃべってる」

持ちやすいからと、縄を解かずまま男三名を担ぎ上げた女は、中の一人がしわがれ声で呼びかけてきたのには驚いたようだ。女の力で男を、それも三名も持ち上げたことのほうが驚くべきことではあるが。痺れ薬でも飲まされているのか、苦しそうな自衛隊長は女へどこの配属かと尋ねた。

「えつと、うんと……あニヤニヤニヤニヤっ！！さあ、帰ろう！」

「おい」

わからないらしい。

女を信用していない隊長も、手足が縛られたままではどうすることもできず、女が飛び降りれば、彼らも飛び降りるほかない。悲鳴は聞こえなかったが、地面に叩きつけられる音もなかった。

「な、何なの？」

「特殊工作捜査本部巡廻特攻隊のメンバーの一人だ」

「と、とく何？」

「コードネームは“キャッツ”、見た目どおりな。私は“ガン・フアイター”、彼女と同じ所属だ」

おかしな名前を口走る男の顔を見るべく、あるいは父親以外の男が

背後にすることに驚いて振り返ろうとしたとき、理沙は首の後ろに鈍痛を感じ、そのまま意識を暗闇に投じていた。どさつと崩れる理沙の体を壁にもたれかけ、ガン・ファイターと名乗る男は、震えながら下唇をかみ締める片瀬雄一郎へと体を向ける。

右と左にホルスターを下げ、両者に自慢の銃を収めている。四五口径の銃口を揺らすことなくしつかりと構え、雄一郎に一も二もなく平伏させた。

「キャッツめ、肝心の片瀬博士を連れて行くことを忘れている。私もきてよかった」

「わ、私を連れて行くのか」

「そうだ。わかっていと思うが、我々は政府に頼まれ、ここにいる。警察に突き出すだの、誘拐だのという馬鹿なことは言うな」

ということはやはり、自衛隊の味方か。時間ばかりが過ぎていくと判断した政府が、特殊部隊を呼んで片をつけようとしたのだろう。

そういえば、政府は密かに、雄一郎とは別の研究員を使い特殊能力を身に付けた人間兵士を作っている、と聞いたことがある。その成果が、彼らなのだろう。

「私を連れて行くというなら、それなりの覚悟が必要だぞ」

「覚悟？」

「そうだ。私にはおまえら特殊部隊よりも強い後ろ盾がいる。彼は私が連れて行かれたと知ったら、おまえら自衛隊をつぶしに行くだろう」

「……」

「彼の強さは本物だ、どんなに鍛え抜いたやつでも、彼には敵わない。悪いことは言わん、何もせずに帰ることだ。この件から手を引け」

「……」

「ほら、さつさと帰れ」

「……何のつもりだ？何の脅しにもならんぞ？」

「脅してはない、本当のことを言ったただけだ」

「私はただ、おまえを本部へ連れ帰るだけだ。おまえの仲間がおまえを連れ帰しにくるなら、それでもいい。暇つぶしに困っていたところだしな」

雄一郎は脳をフル回転させて、逃げ道を捜したが、この石のような男には何を言っても通用しそうに無い。妻も娘も眠っている。頼るべき相手はどこにもいない、もしこの男についていけば、一体どうなるのだろうか。ここよりマシな場所につけるだろうが、受ける罰は酷い。チップについて根掘り葉掘り聞かれるに決まっている。

「チップは無いぞ、私はあのチップを持っていない」

「それは知っている。別のメンバーが動いている。何も心配することはない。おまえはただ、チップについての知る限りの情報を政府に提供するだけでいい。それまではおまえも、おまえの家族も生かしておく」

ふん、とそっぽ向く。雄一郎に何も言うことはなくなった。

ガン・ファイターは雄一郎を脇に抱え、キャッツと同じように外へと跳んだ。今度は恐怖に口を開いた雄一郎が悲鳴を上げた。

コンクリートは冷たく笑っていた。父親の悲鳴で目を覚ました母親と理沙、理沙は頭がぼんやりとしたが、無理にでも自らの体を起こし、駆けつけた母親と抱き合う。

「理沙、ああ、どこか痛いのか？……ああ、どうしてこんなところに……」

「ママ、大丈夫よ。きつと、きつと、あの人が助けてくれる……」

「あの人が？……理沙、パパのことはもう忘れなさい……パパは……」
「違うわママ。別の人よ、とっても頼りになる人」

母親にはさっぱりわからなかっただろう。だが、とろんと蕩ける娘の目つきに、何か悟ることがあったようだ。優しげに微笑む母親は、弱々しくも父親よりも頼もしい。

「じゅめんね……ママ、あたし、ママと一緒にいれなくて……」

「一緒にいるわ……ここに……ここに……理沙、あれはうまく処理できたの？」

「うん。まあ、ね」

「なら、もう安心ね。ママと二人で、ママの実家に帰りましょう。」

「パパの事なんか気にしなくていいのよ、ね？そうしましょう、理沙」

「ママ……」

理沙を抱きしめる母親の手には力がこめられる。二度と離すまいとするその母親の目には、熱いものが込みあがっていた。理沙も嗚咽を堪える。死ぬほど怖い思いをしたためでもなく、これから母の実家に帰り、幸せと呼べる日々を過ごせるからでもない。むしろ、逆である。

この先、片瀬雄一郎がチップの使用方法を伝えれば、それを悪用しようとするものにこの世は終焉を告げ、しかしその前に、チップの力が他に生産されないよう、チップに関するあらゆる情報をもった人物たちが殺される。実家に行ったとしても、政府が相手では無理だろう、どこかかと家にやってきて、銃声二発でことがすむ。なんて非道な。

生きる道はないのか、なぜ自分たちがこんな死に方をしなければならぬのか、そのための涙であった。

頭をよぎる美影身に助けを乞うか、しかし、理沙は首を横に振る。

悠馬は言ったのだ、他人を救おうとするなんて行為は自殺行為であり、救うのは自分だけだと。つまり、悠馬にとって他人だろうが、家族だろうが、とにかく自分とは一切関係のない存在なのだ。

そうは言っていないのだが、理沙は口を尖らせて、そんな非情なことを言う悠馬の姿を忘れようとした。どうしても忘れられないのはあの美貌のせいだとわかっている。くやしかった。

「あのう」

「!？」

あまりにも唐突に声をかけてきたものだから、仰天して声がでなかった。母親は耳を貫くような高い悲鳴をあげていた。おかげで、やって来たものは耳をふさぐはめになったが。

冷たい風を送ってくる窓枠から登場してくるものが多かったが、や

つとまともに扉から登場した。それも、会いたいと願っていた人物が。

「悠馬さん！」

「理沙！？知り合いなの？」

ばあつと顔を明るくした娘に、母親はしばし戸惑い、悠馬と理沙とを交互に見比べた。すぐに頬を赤くし、悠馬のほうに顔を向けられなくなってしまうたが。

「ママ、この人！頼りになる人！」

「あのね、僕は正義のヒーローじゃないんだってば」

「知ってるわ、あなた自分しか守らないんでしょ？」

喜んでいいのやら、追いつ返したほうがいいのだろうか。理沙は反応に困ったが、悠馬はそんなことちっとも気にしていないようだった。扉を大きく開き、早く外へ出よう、と言った。

「何よ、ここに運んだのはあなたじゃないの？」

「自衛隊に見つかった。やっぱり、自衛隊は自衛ではなく攻撃を目的とした部隊だよ。やり口がセコイ」

「せ、セコイ？」

「どんなに小さくても、チップに関わったものは全員殺すと決めらしい。このビルにも爆弾が仕掛けられてた」

「ば、爆弾！？」

「そうぞ。だから木っ端微塵にならないうちに、早く逃げよう」

どこに爆弾が仕掛けられているのは知らないが、ここは悠馬に従って逃げるしかない。

外に出て、数十メートル先にある商店街にたどり着いたとき、重い音とともに熱風が頬を掠めていった。炎上するビルと悲鳴を上げて逃げ惑う人々を見たのはすぐ。今、まだあそこにいれば、間違いなく死んでいた。いや、政府は片瀬母子が死んだものと思っているだろう。だが、死ななかつた。

「さ、もういいだろう。駅はすぐそこだし、少ししかないけど、これを使って」

「え、何これ？」

悠馬が手渡したのは何枚かの札が入った白い封筒だった。

「ここにはやつらが君らを見つけるだろう？君らは名前を変えて、慎ましく生きなさい」

「あ、あの」

「ああ、そうそう。言い忘れてたけどやつらのせいで君らの豪邸はボロボロ、戻ったって何も残っちゃいないから、戻らないほうがいい」

簡単な説明ですべてを伝え終えたような表情を浮かべる悠馬に、理沙は食って掛かった。

「待つてよ！これからどうしろって言うの？まさか、このまま、はい、さようなら？」

「そりゃあねえ。僕は君らの身を守るボディガードではないし、君らがいては仕事の邪魔になる」

「仕事って、あなたは隠すだけが仕事でしょ」

「もちろん」

「なら、なんであたしたちを助けてくれるの？」

「助けてないよ。ここから先は君たち次第だ。死ぬも生きるもね。依頼人をここまで送るだけさ」

「そう、依頼人をね。偉いじゃないの」

もやもやした気持ちが晴れず、なぜかすぐに駅のホームへ向かうことができない。やはり、政府があとから追いかけてくると不安があるのもあるが、何より、ここで悠馬と別れるというのが名残惜しい。性格の悪い見かけだけの男だと自分を言い聞かせても、それを肯定するだけの意識はない。理沙の心は本能のままに命令を出した。

「ママ」

「理沙、この方の好意に甘えましょう。さ、行きましょ」

「ママ、先に行って」

「っ？……何を言っているの……理沙、あなた今、なんて……」

「あたし、パパがどうなったか確かめてくる」

「そんな！あんな人のことなんて、もうどうでもいいのよ！あんな人忘れなさい、ママと一緒に実家に行きましょう」

「ダメよ、ママ。ママはあたしの大好きなママだけど、パパもあたしのパパだし」

「……理沙」

「心配しないで、ママ。平気よ、パパの死体でも拝んですぐママのところ行くから」

無言で首を横に振り、けれど理沙からずっと目を離せないでいる母親に満面の笑みを浮かべ、理沙は母親を急かした。無理やり切符を買い求め、背中を押し出す。

「待って、理沙！！待ちなさい！理沙！」

「……ごめんね、ママ。でも、絶対ママのところに行くから、待って。おじいちゃんとおばあちゃんと一緒に、ね？待ってて」

「理沙……」

娘の熱意に押されたか、結局母親は泣きながら、電車に乗っていった。何度も、待っていると告げて。悠馬にもよろしくお願ひしますと頭を下げ、電車は走っていった。

「で？」

「えへ」

「知らないよ、僕は」

「あたしは依頼人なのよ、依頼人が殺されてもいいの？」

「そのために先払いでもらってる」

「ガード込みで頼めない？」

「頼めない」

さっと黒のロングコートを翻し、黒の影を伴って商店街へと戻っていく悠馬の姿を理沙は急いで追いかけた。

「お願い！お願いします！お代官様〜！！」

「いくら頼まれてもやらない。ガードマンならそこら辺の連中に声をかければ集まるよ」

「ゴロツキなんて、危ないじゃない。こんなか弱い乙女が犯されち

「やうかもしれないのよ？あなた、責任とってくれる？」

「何で僕が」

「乙女を捨てようとするあなたが悪いのよ」

「この街じゃ生きていけないね、君は」

「生きてきたわよ、今まで」

「表だけね」

「裏もあるっての？なら、教えてよイトコ紹介して」

「情報屋はあっちだよ」

「もう！」

どうやっても自分を連れて行く気がない悠馬に、理沙はとうとうさじを投げた。その場で地団駄踏み、大群衆がちらちらと視線を投げ中、大声でわめき散らす。

「いいわよ！あなたになんか頼まないわよ！どうせ、あんたみたいなひよろい男にガードマンなんか勤まると思つてないわよ！イーっだ！」

それだけ言い放つと、理沙は悠馬とは逆の方向に進行方向を変え、駆け出した。あんなことを言うつもりはなかったが、悠馬と離れる気はなかったが、言ってしまったものは仕方がない。どうしようかと考えあぐねる理沙は、ピンとひらめいた。ちょうどそれらしいことを副業にしている友人がいた。その人に頼むしかあるまい。

雑踏に消える理沙の後ろ姿を黙認しつつ、見えなくなると自分の手を見つめて悠馬は小首をかしげた。

「ひよろい……」

少々怒っているようにも聞こえるが、悠馬の表情を見る限りではそんな様子はまったくくない。肩をすくめて、絶え間なく流れる人々の群れに紛れ込んだ悠馬の背中を、じつと凝視する者がいた。

空はすっかり暗闇が落ちていく。月明かりも乏しく、星の数も少ない。デパートのきらびやかなネオンの光やら、商店街に連なる電球の数々、家々の明かりや街頭もあるが、人々の頭で前後見づらい。常に動いている商店街のざわめきに邪魔されず、悠馬を捕らえたそ

の視線は揺らぐことがなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2029a/>

影隠し

2010年10月10日01時10分発行